
東方従者録～すべては我が主の為に～

ワラキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方従者録〜すべては我が主の為に〜

【Nコード】

N8502W

【作者名】

ワラキー

【あらすじ】

昔、とある館の主に仕えていた従者がいた。従者は主に忠誠を誓い、永遠に仕えることを誓いました。しかし、その従者はある事件にて、帰らぬ身となってしまいます。

時は現在、幻想郷にはとある噂が流れていました。『人里で殺人事件が起きている』と。

これは、時を超えてでも主に仕えた、とある従者のお話。

第一話 それは昔のお話

それは、昔のお話。否、昔というのはあくまで人間からの視点であり、妖怪から見てみたらそれは些細な時間かもしれない。が、今回はあくまで人間からの視点で話して行こう。

それは昔のお話。どこかのある吸血鬼が住む館の話。

「ねえ、。紅茶はまだかしら？」

「はい、お嬢様。もう準備できています。」

「、夜の散歩に行くわよ。」

「わかりました。ああ、お外は冷えますのでこれを着てください。」

「フフツ、ありがとう。」

それはどこにでもありふれた、主と従者の形。主の背に、翼という人ではない証はあるものの、それはとても幸せにそうだった。

「ねえ、。ずっと、ずっと私と一緒に居てくれる？」

「はい、私が生きている限りずっとお仕えますよ、お嬢様。」

とても幸せそうだった。その従者は常に主の傍に居続け、仕えていた。そんな日が、己が死ぬまでずっと続くものだ、そう思っていた。

だが、どの時代も、どの世界も異形は虐げられる。無論、人ではない人外である吸血鬼も当然のごとく弾圧された。

魔女狩り。

正確には魔女ではないが、魔法を使うのは吸血鬼も魔女も同じ。しかも、その館には主の友である魔女もいた。人間にとってはそれだけで攻撃する理由は十分だっただろう。

人間たちは攻めてきた。キリストのお偉い方を指導者にし、民衆が束になって攻めてきた。

従者は抵抗した。主を守るため、ありとあらゆる手段を用いて抵抗した。

罠に嵌めて殺した。待ち伏せして殺した。指導者を暗殺した。直接自ら出向いて殺した。騙し、敵同士に殺し合いをさせた。殺し、殺し、とにかく殺した。

こうして、従者は館を守った。いや、守っていた。だが、従者は人間。大量の人を殺し、もはや従者の心は壊れていた。否、それだけではない。壊れ、狂っていた。狂い、人を殺すのに抵抗を感じなくどころか、逆にその殺戮を楽しむようになった。

そして、狂い、殺し、狂い尽くし、殺しの限りを尽くした結果、従者は倒れた。四肢を矢で貫かれ、胸にも矢が数本突き刺さり、既に死ぬことは目に見えていた。そんな従者の最期の言葉は……。

「お……じよ……さま……。お怪我は……。ないです……。か？」

「……ええ、大丈夫よ。誰も、傷一つないわ……。」

「そう……。です……。か。よか……。た……。」

そう、従者は破綻し、狂っても尚、主とこの館を守り続けていたのだ。

「い、まま、で・・・ありがとう・・・ございま・・・した。レミリアお・・・嬢さ、ま。」

「・・・私の方も今まで世話になったわ。ありがとう、十三夜鏡夜。私の一番の従者。」

これが、主と従者の最期の会話だった。こうして、従者は息を引き取った。

第二話 殺しても良い妖怪ですか？

レミリア

「・・・嫌な夢を見たわ。」

私起きたと同時に口にしたのはそんな言葉だった。嫌な夢。しかもその中でもとびっきりの悪夢。思い出したくもない。私の不甲斐無さで一人の従者が死んだ事など。もっと、あの時何か出来たのでは？もっと私がしっかりしていれば従者・・・鏡夜は死ななかったのでは？

・・・止めましょう。過去を悔いても意味がないわ。考えたところで、もう彼はいない。

と、思考を断ち切ろうとしたとき、ドアがノックされた。

「おはようございます、お嬢様。起きていますか？」

「ええ、起きていますわ。」

「では、お着替えのお手伝いをさせていただきます。」

と言って、私の部屋に入ってきたのは十六夜咲夜。私のメイドでこの紅魔館のメイド長をしている。咲夜はとても優秀で私の自慢のメイドよ。

服を着替えている途中、咲夜が話しかけてきた。

「そう言えば、お嬢様はあの噂をご存じですか？」

「あの噂？」

「はい、人里の人間の間で騒がれているのですが……。」

「どんな噂なの？」

「それが……、人が殺されているそうです。毎晩一人ずつ。ですが……。」

「？歯切れが悪いわね。何かあるの？」

「人里では殺されてると言っているのですが、どうもおかしいのです。」

「何が？」

「人は、一人も殺されていません。病死や、老衰は別ですが、ここ最近で殺人などありませんでした。」

「……どう言う事？人が殺されているという噂はあるのに、その実、人は殺されていないというの？意味が分からないわ。」

「おかしいわね。噂というのは必ずどこか起源があるはずなのだけれど……。」

「はい。だからおかしいのです。噂に多少の尾ひれ背びれは付きものですが、事実がその全くの間逆というのは普通はあり得ないです。」

「そうね……、咲夜、少し調べてみなさい。その噂に興味を持つたわ。」

「御意。あ、そういえば。」

「今度は何？」

「その人を殺して回っているのは、金髪の執事服を着た男だと言っていました。」

「……そう。まあ、いいわ。調べて来て頂戴。」

「御意。」

「……金髪の執事服？いえ、まさかね。今日あんな夢を見たからそ

んな事を考えてしまうのね。彼が生きている筈がない。彼が死んだのは……もう、300年も前の話なのだから。

「紫」

ここ最近、幻想郷はある噂でもちきり。それは、『人里で殺人事件』というもののだけで、どうもこの噂、不可解な点が多すぎる。実際、人里では殺人事件など起こっていない。しかし、実際にそう言う噂は流れている。おかしい、明らかな異常事態……いえ、これは『異変』ね。

「ハア、つい最近、あの地底の異変が終わったばかりだと言うのに、今度は変な噂の異変。いつになったら幻想郷は落ち着くのかしらね。」

「紫様、藍です。」

「入りなさい。」

「失礼します。紫様、人里での件、調べて参りました。」

「そう。で？どうだった？」

「……白です。人里での殺人事件は起きていませんでした。しかも……。」

「しかも？」

「その噂の起源がありません。つまり、いつの間にやら、何の前兆も無く突然噂が発生したという事になります。」

「……不可解ね。それはもう噂ではないわ。」

だが、こんな事は前代未聞。起源のない噂などありえない。そう、ありえない。必ず、どこかに起源はある。

「……嫌な予感がするわね。藍、その噂の起源をもっとくまなく

探しなさい。博霊大結界に干渉してでも探し出しなさい。」

「分かりました。では。」

さて、私も少し、探ってみようかしらね。

く???く

・・・ああ、この土地は他に比べて霊力、妖力、そして魔力がずこぶる高いですね。いいですね、いいですね、いいですね。これなら私の姿もずっと留めて要られそうですね。あわよくば、『お嬢様』もここに居られたら最良なのですが、まあ適当に『種』を蒔いただけなのでその可能性は限りなく少ないですね。まあ、地獄から逃げだせただけでも良しとしなければなりませんね。

「ねえ。」

おおっと、誰かに話しかけられてしまいましたね。驚きです、驚きです、驚きです。

「なんででしょう？私如きに話しかけてくるなど、よっぽどお困りでしょう。私でよければ色々解決して差し上げますよ。」

「ホント！？じゃあ、あなたは食べられる人間なのかー？」

おおっと、どうやらこの土地にも人食い妖怪なるものがあるようです。またまた驚きです。いや、このご時世にこれだけの妖力を持っている妖怪がいること自体が驚きなのですが、まあ、今はそんなことは些細なことですね。

「ふむ、食べれるか食べれないかですか。それは難しい質問ですね
まあ、あなたが妖怪なら私も当然食べられるでしょう。」

「なら、食べても良いのかー？」

「私をですか？そうですね・・・、あ、良いですが、条件があります。」

「？」

「私がする質問に答えてください。迅速に、尚且つ分かりやすく、
一字一句噛むことなく、答えてくだされば、食べても良いですよ。」

「わかったのだー。」

「では、まず一つ目、あなたのお名前を教えてください。」

「ルーミアなのだー。」

「そうですね、では、ルーミアさん。二つ目の質問です。あなたは

」

「

殺しても良い妖怪ですか？」

「・・・え？」

「私も最近はやさしくなりましたが、鈍っていたのですが、ここらで調
子を取り戻さないと駄目なですよ？理解しましたか？ヒ、ヒヒヒ
で？どうなのですか？あなたは、ヒヒ、殺、殺シテモ問題ナイ妖怪
デスカ？」

第三話 まあ、良い運動になりました

ふむ、この土地の妖怪のレベルはこの程度なのでしょうか？

そう言つて、手に掴んだ血まみれの少女を見てみます。確か、奇妙な能力を使つてきましたね。あれは闇でしょうか？いやはや、持つ能力も使い方次第とは良く言つたものです。まあ、闇如きで私はどうにも出来ませんが、そうですね、ラジオ体操ぐらいにはなりましたね。次は準備運動です。とりあえず、このルーミアとやらの脳から情報を知らなければなりませんね。この土地にもそれなりの使い手はいるでしょう。楽しみです、楽しみです、楽しみです。

・・・おっと、先走つてはいけませんね。その前にこの土地に流した情報・・・噂を決まりごとにしてブームにしなければ。私もまだ完璧に現界したわけではないですからね。

「・・・ふむ！成程、花畑ですか。ここは魔法の森という所らしいですから、・・・場所が分からないですね。飛んで行った方が早そうですね。」

さて、今度の相手は、準備体操どころかフルマラソンを走つた後になるくらい楽しませてもらえる事を期待しましょう。

く紫く

「紫様！噂に変化が！」

「何ですつて？どんな？」

「それが・・・遂に殺された人と殺した人を見たという人間が現れ

ました。」

「なら、殺された人はいるのね？」

「・・・いえ、いません。ですが、人里ではもはや確実に殺人事件は起きているものとなっています。」

一体この現象は何？何故火も無いところからそんな噂が流れるのか理解できない。

「ですが、分かった事もあります。」

「何かしら？」

「どうやらこの噂、力がある程度ある人や妖怪、妖精には伝わっていないそうです。」

・・・成程、どうやらこの噂、何者かが裏で糸を引いているわね。恐らく、能力による干渉。だけど・・・。

「目的が分からないわ。こんな根も葉もない、力がない者だけが信じ込む噂を流して、流した方にはなにもメリットがない。」

「反乱とか、幻想郷の壊滅が目的でしょうか？」

「否、それは無いわ。それが目的なら、もっと洗脳能力が高く、力のある者も信じ込む噂を流すはず。だから、ますます分からないのよ。メリットが考えられない。」

ああ、もうっ、あと少しで冬眠の時期だから早く寝る準備しないといけないのにまったく面倒な時に面倒な異変に出くわしちゃったじゃない！

「失礼します。八雲紫、いますか？」

・・・面倒な時に面倒なのが来たわね。

「あら、閻魔さまではありませんか。このような所に一体どう言ったご用で？すみませんが、お説教はまたにしてくれると助かるのですが？」

「あなたの私に対する評価が良く分かりました。しかし残念ながら、今回は説教ではありません。少し、地獄の方で問題がありまして。」

「地獄？^{わたくし}私たちには関係ない話だと思うのですが？」

「大ありです。というか、最後まで聞いてください。その地獄の問題ですが、今から約200年前にある魂が地獄から逃げ出しました。もちろん、その魂を捕まえようと大量の死神を派遣して搜索に当たりました。」

「ならば、問題はますますない筈ではありませんか。一魂が地獄から逃れられるとはとても思いませんか？」

「だ・か・ら！話を最後まで聞いてください！因みに、問題は大ありです！その魂は確かに発見されました。が、一度も捕まえる事は敵いませんでした。何故か、それは、発見した死神は一人残らず殺されているからです。」

・・・たかが一魂が死神を殺す？

「それに、その魂が現れる時も特殊なのです。現れる地域に、何らかの根も葉もない噂が流れ、その時にその魂が現れます。いえ、現れると言うのは、語弊がありますね。その魂が発生します。そして、その噂された地域の住民を皆殺しにして、また消えるのです。」

噂？それってまさか、今この幻想郷で起きている事と何か関係が？

「そして、その魂が、今日、地獄にて観測されました。その魂は地獄では有名なS級の指名手配犯なので情報が回るのが早いです。」

「まさか、その魂が・・・。」

「はい、しかし、もう既に魂とは言えませんが。肉体を持っています。肉を食べています。その魂が今日、この幻想郷にて、『発生』しました。」

これは、冬眠がどうのこうの言っている場合では無くなってきたわね。

「当然です。下手すれば幻想郷の危機ですので、あなたにお願いがあります。」

「その魂を特定して、迅速に殺せ、というものでしょうか？」

「いえ、半分違います。迅速に生け捕りにして、私の所まで連れて来て下さい。私の方も今回はあなたと協力して行動します。」

「閻魔さまからの直々の頼みを、断る道理はありませんわね。更に、それが幻想郷の危機と言われれば尚の事。」

「（胡散臭い）よろしくお願いします。今回、この事に当たるにおいて、幻想郷でもトップクラスの方々の招集をよろしくお願いします。私は、地底と白玉楼、妖怪の山を当たります。」

「では、私のほうは博霊神社、紅魔館と永遠亭それとお花畑を訪ねてみます。」

「魔法の森と天界の方は？」

「魔法の森は博霊神社を訪れば、自ずと。天界は嫌いなので却下ですわ。」

「一応、幻想郷の危機なので、好き嫌いで判断してほしくないのですが……。」

今回は、結構、いや、かなりの大事になりそうね。

レミリア

「と言うわけです。協力して下さると助かるのですが?」

今、あの胡散臭いスキマ妖怪がこの紅魔館に来ている。用件は簡単にまとめると、幻想郷の危機だから協力してその原因を捕まえて、地獄に送り返すというものだった。

「なんで、私たちがそんなことしなくちゃいけないのよ?」

「あら?別に協力してくれなくても良いですよ?その際、もしこの館が被害にあっても私たちは一切関与しませんが。」

ちっ、やっぱりやり辛いわね。

「まあ、いいわ。私たち紅魔館もその件、協力させてもらっわ。皆も良いわね?」

そう言つて、紅魔館の住民・・・咲夜、めい・・・中国、パチュリィ、そしてその従者の小悪魔を見る。

「問題ありません。」

「咲夜さんに同じくですが、私は中国ではありません!美鈴です!」

「レミイが決めた事なら、私も異議は無いわ。」

「私もです。」

「そう言っわけよ。で?それはいつやるの?」

「今日ですわ。」

「随分急ね!?!」

今日!?!え、今日なの!?!てつきり明日とか、そのあたりだと思っ
ていたのに、よりも寄って今日なの!?!急過ぎだわ。

「じゃ、よろしくお願いしますわ。」

と言って、あの胡散臭い妖怪はスキマの中に消えて行った。

「・・・良かったのレミイ？今日は・・・あいつの命日でしょう？」
「・・・そうね。ま、いいわ。ちゃっちゃと終わらせましょう。」

よりもよって、鏡夜の命日に・・・ハア。

「あの・・・パチユリー様。」

「何？」

「あいつとは一体・・・。」

「ああ、そう言えば咲夜には話したことなかったわね。レミイ、話しても良いかしら？」

「ええ。」

まあ、咲夜になら話しても問題ないでしょう。近々話そうとも思っていたし。

「なら、話すわ。この紅魔館が昔・・・今から250年前まで外の世界にあった事は知っているわね？」

「はい、存じています。」

「あいつとは、その時レミイに仕えていた執事の事よ。仕事もうまくこなすし、器量よし、顔よし、性格もよしと、とにかく何でもできた執事で、レミイもよく懐いていたわ。」

「パ、パチエ!？」

な、何よ！今そんなこと言わなくても良いじゃない。

「フッフ、でね、その執事なんだけど、ある出来事の末、死んでし

まったのよ。その命日が今日って話。」

「ある出来事とはなんですか？」

「まあ、簡単に言っと、人外を殺せと言う人間の宗教じみた行動よ。彼は、その人間たちから私たちを守るために、心が壊れて、狂いながらも戦い、そして死んでしまったのよ。」

そう。彼・・・鏡夜は、そうやって死んで行ってしまった。今でも思う、あの時、今の私ぐらい力があれば、鏡夜は死なずに済んでいたのではないかと、

「正直、後悔しているわ。あの時は私のそこまで魔法が使えなかったから、戦闘面においては全部彼に任せてしまっていたの。」

「そう・・・ですか。」

「まあ、済んでしまった事を後悔しても遅いと言う事で、今の私たちがあのだけれど。話はこんなものかしら？」

「はい、ありがとうございました。」

そうね。鏡夜の死を乗り越えて、今の私たちがある。今のこの状態は間違いなく、鏡夜が与えてくれたものだわ。

「ところでレミィ。」

「何？」

「その発生している魂の話だけど、本当に大丈夫かしら？」

「何が？」

「さっきから何何しか言わないわね・・・。スキマの話を聞いたところ、その魂、矢鱈強いみたいよ？何か対策はして行くの？」

「フツ、愚問ね。どんな強者が現れようと、この爪で引き裂いて進むのみよ。」

「ハア、そう言うと思っていたわ。じゃあ、対策は無しで良いわね？」

「ええ。」

フフフツ、どんな奴なのか楽しみだわ……。ああ、早く会ってみたいわね。

くくくくく

花畑に着きました。ふむ、素晴らしい。いまどきこのような花畑、滅多にありませんよ。おおっと、もうこれ（ルーミア）は必要ありませんね。その辺にポイして行きましょう。ゴミをポイ捨てしてはいけないという法律はあれど、妖怪をポイ捨てすると言う法律は無いですから、問題は皆無でしょう。……。死体遺棄に、妖怪は入るのでしょうか？

それにしても……

「素晴らしい花畑ですね。お嬢様にもお見せしたい。このような素晴らしい花畑を手入れている方は、さぞ心が綺麗で、善良で、殺しがいのある方なのでしょう。いやはや素晴らしい。この花畑に拍手喝采を要求したいものです。」

「あら？なら、要求して貰っても良いかしら？不法侵入者さん。」

おや、誰かいたようですね。まあ、いるところに来たので当然いるに決まっているでしょうが。

「分かりました。では、拍手喝采を要求します。まあ、私が要求して、それが起こる可能性は皆無なのですがね。」

「そりゃそうよ。それよりも私はあなたから面白い言葉を聞いたのだけどいいかしら？」

「ふむ？私が面白い事を？記憶にありませんね。洒落を言っ たつもりもありませんが。」

「言っ たわよ、殺しがいがあるって。」

ああ、アレ。面白い？何が？分からない、分からない、分からない。

「面白かったですか？別段、面白い事を言っ たつもりもなかったのですが？」

「ええ、最高に面白かったわ。まさか、私を殺すだの言っ てくるなんて。」

「え？あ、もしや、あなたは不死の類でしょうか？おお！これはこれは、またまた、珍しい。今までありとあらゆる場所を見てきましたが、不死の類は見た事がありませんでした。ふむ、この土地には妖怪以外の珍妙な生物も生息しているのですね。いやはや、この土地の霊力、妖力、魔力のお陰でこの姿を永久に留めて置けるだけではなく、さまざまな多種多様な生物が生息している！何と素晴らしー！エクセレント！！こんなにも殺しがいいのある土地も久しぶりです！ヒヒヒ、ヒヒヒヒヒ！！良イ！実ニ良イ！！サア！開幕ダ！貴殿ノ脳髓ヲブチマケ内臓ヲグチャグチャニ！カラダノ外側ト内側ヲ逆サマニ！！キキ！キキキキキ！！」

「気でも触れているの・・・？」

「キ、キキ！キキキキキ！！さあ！行くぞ！！」

（幽香）

「さあ！行くぞ！」

目の前の狂人が消えた、と思っ た瞬間、目の前に黒い何かを纏っ た

彼が現れた。

「カットォ！」

「っ！」

本能的にそれを避ける。どうやら、唯の『人間』という認識を改めた方が良さそうね。

あの黒い何かが何であれ、まずは攻撃をしない事には始まらない。

「喰らいなさい！」

傘を胴を薙ぐように全力で振る。が、

「ヒヒヒ……。」

それは、あっさり、単純に手で受け止められた。それだけでなく、黒い何かが傘に纏わりついて来る。

「くっ、こんなもの……！」

それを振り払うために、傘を振るう。しかし、私の手に感じたのはいつもよりも軽い感触だった。

「なっ……。」

傘が、傘の持ち手から先が無くなっていった。まさか、あの黒い何か？だとしたら、あのくらい何かには触れては絶対にいけないわね。使用価値が無くなった、傘の残骸を捨て、私のおきの技を放つ。

「マスタースパーク!!」

その手のひらから放たれた光線は、文字通り、あの狂人の腰から上を消し飛ばした。

「え……。」

正直、これで終わるとは思ってもみなかった。あつけない。初めのうちはかなりの危機を感じたものだが、実際に技を使えばこの程度。拍子抜け、この言葉が今の状況に一番あてはまるだろう。

「なんだったのよ一体……。」

狂人の亡骸に背を向け、家に帰る。その時……

「キキ!キキキキキキ!!」

「っ!?!」

耳にこびりつくあの笑い声が聞こえた、後ろを振り向くと、まだ頭部が完治していないのにも関わらず、笑っている狂人がいた。

「……どうやったのかしら?」

「ヒヒヒヒ!恐怖したか?絶望したか?いいぞ!その感情を抱いたまま死んでいくが良い!!」

訳が分からない。何故、胴体を消し去られて生きていられるのか。だが、今はそんな事よりも、目の前に危険人物を消した方が良さそうね。

「マスター」

「

その名を紡ごうとした瞬間、狂人の方から

「それにはもう飽きた。」

と、聞こえた気がした。

「スパーク!!」

次もさつきと同じように喰らうものだと思っていた。しかし、目の前で信じられない事が起きた。

「ブレイク!!」

「・・・え？」

狂人が黒い何かを拳に纏い、それでごく普通に、迫りくる光線を殴った。均衡したのは一瞬。次の瞬間には、光線は跡形もなく消えていた。

「・・・ヒヒ、準備運動にはなった。感謝するとともに、終幕しよう。何、準備運動に協力してくれたお礼に、命まではとらないであげましょう。」

「っ、なめるな!!!!」

狂人に殴りかかる。己の最高の力とスピードにより、一瞬で狂人の目の前に移動し、狂人の顔面を思いっきり殴る。筈だった。

「カット・・・。」

そんな言葉が聞こえた瞬間、私の殴るために狂人に突きだした腕が

消えた。遅れて、大量の血が腕から噴き出してくる。

「ぐっ、ぐううう!!?」

「ヒヒヒ、カット……。」

その言葉がまた狂人の口から発せられる。だが今度は何かが切られる訳ではなく、黒何かが私の周囲で回りはじめた。

「カッタカッタカッタ……。」

その黒い何かは、密度を増し、さらに回転し始める。

「カッタカッタカッタカッタ……。」

その黒い何かはさらに密度も回転も増し、次第に私の皮膚を切り裂いていく。

「カットカットカットカットカットカットカットカットカット
トカットカットカットカットカットカットカットカットカット
トカットカットカットカットカットカットカットカットカット
トカットカットカットカットカットカットカットカットカット」

瞬間、私の意識は黒い何かに覆われると同時に途絶えた。

)
 ?
 ?
 ?
 ;
)

ふむ、正直、結構やばかったですよ。まさか上半身が消し去られるとは思ってもみませんでした。準備運動どころか、長距離走を走ったような感じになってしまいましたよ。まあ、長距離走ったぐらいではあまり疲れないのですが、良い運動にはなりました。

彼女は・・・ああ、勢い余って達磨にしまいましたか。ま、死にはしないでしょう。かなり力のある妖怪のようですから。

「さて、次はどこに行きましょうか。」

彼女の頭を掴み、さらに情報を探していく。

「紅魔館・・・？ふむ、吸血鬼！本当にこの幻想郷は多種多様な生物のオンパレードですね！！良い！実に良い！他には・・・鬼、亡霊、地獄鴉、大妖怪！！素晴らしい、此処まで殺しがいのある地域も久しぶりです。ヒ、ヒヒヒ、・・・ああ、ですが、紅魔館は止めておきましょう。『お嬢様』の同族を殺す訳にはいきませんからね・・・もしかすると、『お嬢様』かもしれませんね。だとすると、早速確認しに行かなければ。」

ああ、ですが、今日はもう遅いですね。私も久しぶりに力を使った訳ですから、少し休んでいきましょう。

「そうと決まれば、休める場所を探しましょうか。」

第四話 急展開？お嬢様の為なら世界もひっくり返しますよ

「紫」

「皆さん、お集まり頂きありがとうございます。」

現在、紅魔館にそれぞれの力のある者たちが集まっている。紅魔館はもちろん、幽々子と妖夢、永遠亭のお姫様とその従者その弟子、守矢神社の神とその巫女、さらにあのパパラッチとその部下、そして、霊夢、魔理沙、萃香、アリスと博霊神社にいた人物も集まっている。更に私の方も藍と橙を連れている。閻魔さまあの赤髪の死神と幽香を連れてくるからまさにリンチと言っても過言じゃないほどになっているわね。どこの魂だか知らないが、さすがにこれには同情するわ……。

「スキマ妖怪、まだなの？待ちくたびれたわ。」

「まあまあ、もう少し待って下さいな。」

と、言うと同時に扉から小さい影と大きい影が生えてきた。

「すみません。遅れました。」

「いえいえ。……あら？幽香は？」

「……これだよ。」

そう言って死神が背に背負っていたモノを下した。

『っ！！？』

そこには、血まみれになった人食い妖怪と、達磨になった幽香がいた。

「永琳さん、すぐに治療を。既に、彼は発生して行動を開始します。もはや一刻の猶予ありません。」

「・・・そう言えば、聞いていなかったのだけど、その発生した魂はどれくらい強いのかしら？ 私たちの手に余るのか、余らず、完膚なきまでに叩きのめせるのか。」

と、レミリアが質問してくる。そういえば、私も知らないわね。死神が死んだ事や、発生した地域の住民が皆殺しにされていること以外、聞かされていないわ。

「・・・それが、分らないです。」

「分らない？ という事？」

「実は、その魂、発生する時期によって強さが激しく変わります。それに関してはこちらで調べが付いています。どうやら、彼の強弱は、噂の強弱に左右されるようです。つまり、彼の今の強さは・・・恐らく、此処に居る全員でやっと、と言ったところでしょう。」

・・・そんな規格外な妖怪も、まだ居たのね。

「弱点はあるの？」

「あります。彼は、霊力、妖力、魔力が無いと、あまり長く・・・そうですね、一晩ぐらいしか現界出来ないのですが・・・。」

「ここは幻想郷。その弱点は無いものと考えた方が良いでしょうね。」

「そうです。・・・あ。」

「どうか？」

「い、いえ、それが・・・あまり言いたくは無いのですが・・・ありました、もう一つ。」

「！どんなものが？」

「そ、それが・・・あの、攻撃しないのです、その、子供を・・・。」

『・・・・・・・・。。』

それってつまり・・・ロリコンってことかしら。

「つまり、ロリコンってことね。」

「ですが、おかしい点もあります。」

その弱点に地底の管理者が異を唱えた。・・・若干顔を赤くして。

「だとしたら、何故そのえーっと、ルーミアさんでしたか？その人は何故攻撃を受けているのでしょうか？」

「恐らく、現界して間もないので気でも触れているでしょう。まあ、元々、気が触れていました。」

・・・気が触れていてロリコンって、これ結構楽に捕まるんじゃないかしら？だってこのメンバー、結構いるわよね？幼女体系。

『幼女体系って言うな！！』

「これは失礼しました。では、作戦は決まったも同然ですわね？」

「はい。まず最前線に、諏訪子さん、レミリアさん、萃香さんを配置し、その後ろにさとりさんと橙さん、てゐさんを配置。あとは後ろで援護です。」

『ちよつと待ったあ！！』

全員で同時ツツコミね。無論、私もツツコミたいのだけねど。

「な、何ででしょう？」

「最前線にあなたが入ってないわよ！！」

「その通りです。自分だけ安全地帯から攻撃するなど、ズルすぎですよ。」

「わ、私は幼女体系では・・・。」

「十分幼女体系です。何？『あなた程ではない？』別に程が云々言っているではありません。それに、私は脱ぐとすごいですよ？」

「心読んだ上に何言っているのですか？！」

「事実を暴露したまでです。何？『見え張ってんじゃない？』なら、証明して差し上げましょうか？」

「結構です！」

「と言うわけで、あなたは最前線です。皆さん、異議はありますか？」

「ちょ、何勝手に」

『異議なし！！』

「ええ！？」

・・・さとりも容赦ないわね。

「ふむ、で？これは何の話でしたっけ？」

「あ！そうです！兎に角、その陣形で彼を・・・。」

・・・あれ？今のはおかしくないかしら？男の声で質問が来たけど、この場に男なんていたかしら？否、いない。いるはずがない。ここで、私はある致命的なミスをしていた事に気付いた。彼の特徴はある噂が蔓延した地域に現れる。この『ある噂』とはひょっとして彼の噂、もしくは彼に関係した噂ではないか？いや、そもそも発生条件が噂だけと言うのも違う気がする。彼の話をしている、それも多人数所にも現れるのではないか？

そして、私たちは今、『彼』を捕縛するための作戦を考えていた。
つまり、彼の事に関して話していた。

この答えに辿り着いた瞬間、声の元の周囲にスキマを展開し、そこから大量の弾幕を発射した。
爆音が紅魔館に鳴り響いた。

「・・・迂闊でした。」

「ですが、これで・・・。」

「いえ、まだです。彼がこの程度でやられるのなら、我々地獄も捕縛は簡単でした。」

直後、夢に出そうな声でケタケタと笑う声が聞こえてくる。

「キキ、キキキキキキ！！開幕もしていないと言っのに、随分急な始まりですね。ヒヒ！良いでしょう。開幕直後より鮮血乱無！救いも娯楽も何もありません！ヒヒ、ヒヒヒヒヒヒ！！」

・・・狂ってるわね。言葉に脈絡が無さ過ぎるわ。

「っ！小町！」

「はいさ！」

小町が鎌で先制するが、彼は黒い何かでそれを受け止める。

「閻魔さま？あれはなんでしょう？」

「あれは、悪性情報と言っらしいです。幻覚の類に近いですが、脳に悪質な情報を流し、腕が切れたと言っ事を脳に判断させ、本当に切れてしまっと言っものです。つまり、あの黒いのは、一種のナイフと思ってくれれば良いです。」

「なるほど、厄介な能力ですわね。対策は？」

「無いです。兎に角、あの黒いのに触ってはいけません。」

触ったらアウト。どれだけ危険な能力なのよ・・・。

「総員！一斉攻撃！」

瞬間、彼に向ってさまざまな弾幕が放たれた。

霊符『夢想封印』

恋符『マスタースパーク』

彩符『彩雨』

メイド秘技『殺人ドール』

鬼符『青鬼赤鬼』

咒符『上海人形』

六道剣『一念無量却』

華霊『ゴーストバタフライ』

式神『十二神将の宴』

廃線『ぶらり廃駅下車の旅』

兎符『因幡の素兎』

狂視『狂視調律<イリュージョンシーカー>』

天呪『アポロ13』

神宝『蓬莱の玉の枝 - 無色の郷 - 』

鬼火『超高密度燐禍術』

鴉符『暗夜のデイメア』

狗符『レイビーズバイト』

死符『死者選別の鎌』

審判『ラストジャッジメント』

神祭『エクспанデッド・オンバシラ』

蛙狩『蛙は口ゆえ蛇に吞まるる』

想起『恐怖催眠術』

呪精『ゾンビフェアリー』
爆符『メガフレア』

それぞれが自分の得意かつ強力なスペルを放つ。さすがに、これは効くでしょう。幻想郷に居る考えられる力の強いものが一斉に放つスペルを耐えきれぬわけがない。

彼の様子を窺って見る。こんな、誰もが絶望し、死を覚悟するこの状況の中、彼は・・・

「・・・え？レミリアお嬢様？」

まったく目の前に迫る弾幕など目もくれず、ある一点を見つめていた。

レミリア

「鏡・・・夜・・・？」

何者かが現れた瞬間、私はすぐさま声が出た方を見て絶句した。そこには、あの時、あの死んだ時から姿形が全く変わっていない鏡夜が居たからだ。忘れない、忘れるはずのないその姿を見て、私の思考は止まってしまった。

「そんな・・・まさか・・・。」

「キキ、キキキキキキ！開幕もしていないと言っのに、随分急な始まりですね。ヒヒ！良いでしょう。開幕直後より鮮血乱無！救いも娯楽も何もありません！ヒヒ、ヒヒヒヒヒヒ！！」

狂っていた。鏡夜は、昔と同じで、今も狂っていた。が、今はそんな事どうでもいい。今すぐにも鏡夜の元へ行きたい。そう思い、行動に移そうとするが、それをあの赤い死神が邪魔する。否、邪魔ではない。ただ、鏡夜に攻撃しただけ。しかし、その瞬間、

「総員！一斉攻撃！」

さまざまな弾幕が鏡夜に殺到する。その光景が、昔、彼が死ぬ瞬間と一致した。

「き、鏡夜！！」

無駄だとは分かっていたがそれでも彼の名前を叫ばずには居られなかった。もう、面と向かって言う機会など無いと思っていた彼の名を。

「・・・え？レミリアお嬢様？」

その瞬間、鏡夜は弾幕に吞まれて行った。

（鏡夜）

何故、どうして、分からない。計測せよ、計測せよ、計測せよ！！

「キ、キキキ・・・。」

どういうことです。つまり、あれですか？私は、この私は、お嬢様に喧嘩売っていたということですか？否否否、まさかまさかそんな

はずありません。第一、この土地にお嬢様が・・・、いや、待って下さい。吸血鬼が居ると言う情報はさつき確認しました。ですが、名前までは確認していませんでしたね。ちよっと、遠いですが、他の方々の脳から情報を引き出してみましよう。・・・検索結果、この土地の吸血鬼の名前は、レミリア・スカーレットとフランドール・スカーレットの様です。

「ヒヒ・・・ヒヒヒ・・・。」

ああ、笑うことしかできません。主に喧嘩を売る従者、ハハハ、お終いです。どう責任取りましょう？あ、そうです。

「こいつ、まだ生きてるの!？」

「はい、生きてしまっています。ところでその腋を露出したふしだらで珍妙な巫女さん（謎）。」

「ふしだらで珍妙!？しかも（謎）までご丁寧に言わなくても良いわよ!・・・あれ？」

「そんなことはどうでもいいのですよ。今すぐ私のド頭をぶち抜いてください。今すぐです。」

「え、ええ？」

話が分からない巫女さん（馬）ですね。

「（馬）って何よ!バカって言いたいの!？」

「YES、あなたはもう用無しです。それなら、そこに居る閻魔っばい方。」

「ぽいではなく閻魔です!!って、え?え?」

「む、そんなウソは行けませんよ。閻魔はあなたみたいなちっこい方ではなく、大きいでっぷりとした感じの方でした。まあ、私としてはちっこい方が大変よろしいのですが。」

「ちつこい・・・。」

「あれ？何を落ちこんでいるのですか？ふむ、困りましたね。あ、ではその加齢臭が凄まじそうな妙齢の方。」

「何ですって！？（・・・あれ？さっきまでの緊迫とした空気はいずこえ？）」

「私のド頭をぶち抜いてください。」

「人にモノを頼む時は、それ相応の態度があるのではなくて？」

ふむ、それもそうです。

「分かりました。では、かすかなお年寄りの香りをその身に漂わす妙齢で傘を持っている金髪なお方。私の頭をどうぞぶち抜いてください。」

『プッ！！』

「誰今笑ったの！！スキマにするわよ！それよりもあなた！その金髪なお方とは誰の事かしら？」

「え？かすかなお年寄りの香りをその身に漂わす妙齢で傘を持っている金髪なお方の事ですか？」

「・・・ええ、そうよ（ビキビキ）」

「あなたの事ですが？」

「（ブツチン！）そう、分かったわ。ありがとう。殺してあげるわ。」

「・・・あ、あなたはやっぱりいいです。その奇妙な帽子を被った金髪の方。」

かすかなお年寄りの香りをその身に漂わす妙齢で傘を持っている金髪なお方は何故かワナワナと震えています。もう用無しなので良いです。関心が無くなりました。それよりも、今は目の前に居る素晴らしい口りな方です。

「わ、私？」

「そうです。用件は聞いています。ささ、どうぞ。」

「え、えーっと。」

頭を差し出し、いつでもぶち抜けるようにします。

「え、遠慮するよ・・・。」

「なんと！？ですが、ふむ、遠慮されたのなら仕方ありません。では、そこに居る頭に角が二本生えている鬼っぽい方。お願いします。」

こちらも素晴らしいですねー。おもわず、忠誠心が鼻から出そうになります。出ませんが。忠誠心は己が内に保存しておくのです。

「え、ええつと？」

「簡単なことです。頭をぶち壊せばいいのですから。」

「こう？」

パンー！！

・・・ああ、やはり死にませんか。

「死ねませんね。困りました。」

「え、ええ？」

「すみません、ありがとうございました。」

「う、うん？」

・・・今思ったのですが、何か皆さん、啞然としてませんか？まず、それについての情報から集めた方が良さそうです。

「すみません、ガンキャノンさん」

「ガ、ガンキャノン!？」

「はい、で、ガンキャノンさん。」

「わ、私はガンキャノンじゃない!！」

泣きだしてしまいました。仕方ない。

「では、その烏天狗さん。」

『何故それだけ普通に呼ぶ!？』

「あややや、それって言われちゃいましたね……。」「

「で、よろしいですか？よろしいですね。何故、皆さん、あれほど
啞然としているのですか？」

「あや？それはあなたのいきなりの変わりように驚いているんですよ。」

「変わりよう？ふむ？ちよつと待って下さい。考えます。」

変わりよう？ああ、狂った状態からですか。いや、別段意識して
る訳でもないのですが、ついハードな戦闘になると狂っちゃうので
すがそれは一旦心のタンスに仕舞っておいて、何故変わったのかを
考えましょう。確か、お嬢様に……。

「ああ!！?」

「あややや!！?」

しまった!あらゆる情報が脳を駆け巡りすぎて一番大事な事を忘れ
ていました!!

「お嬢様!！!！」

「ひゃ、ひゃい!」

「申し訳ありませんでしたあ!！」

今までで一番綺麗にきまつた土下座だったと、此処に記しておきま
しょう。

第四話 急展開？お嬢様の為なら世界もひっくり返しますよ（後書き）

タイトルの様に急展開です。いや、元々このように書くつもりでいたのですがどこで間違えてしまったのでしょうか？永遠の謎です。

第五話 この土地の方々は皆、個性的ですね

見事に土下座が決まりました。ここまで綺麗に土下座したのは久しぶりです。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・。』

おや？何も反応がありません。というか、何故にこんなにシーンとしているのでしょうか？分かりません、分かりません、分かりません。

「・・・・・・・・えつと、皆さん？」

「・・・・・・・・とりあえず、何故そのように豹変したのか教えて貰えますか？」

閻魔っぽい人が喋りかけてくれました。

「ぼいではなく閻魔です！何回も言っただけではありませんか！！」

「だから、嘘はいけませんよ？閻魔はもつとでっぴりしています。

あなたの様な小柄な方ではありません。」

「うるさい！！小柄って言わないでください！！それと、閻魔は複数いるのです！だから、私の様な小さい閻魔もいるのです！！」

「認めましたね？素直でよろしいです。」

なでなでしてあげましょう。

「・・・・・・・・はっ！あ、頭を撫でないでください！！」

「おお、つい。で、なんのお話でしたっけ？」

「だ・か・ら！何故いきなりあなたは戦闘態勢を解いたのですかと聞いているんです！！」

「ふむ、長い説明が要りますか？短い説明の方が良いですか？」

「長いほうで。」

「わかりました。あれは、私が16歳のころ」

『長すぎる！！？』

「い、一体どこまでさかのぼる気ですか！」

「え？長く説明しろと言ったので頑張って長くしようとしたのですか・・・。」

頑張ろうとしました。執事たるもの、要求にはお応えする必要があるりますので。

「そこは頑張る所ではありません！！」

「あ、そうですね？ならば、普通に説明します。要するに、お嬢様が居たからです。」

「今度は省き過ぎです！！ああもう！あなたと言う人は融通が利きませんね！！」

む、融通が利かないと言われてしまいました。私は言われた事をやっていただけなのに。

「いいわ、私が聞くわ。」

「大丈夫ですか？かなり個性的な人ですよ？」

「ええ、知っているわ。それで、鏡夜。何故、私に敵意を向けたのかしら。」

「誠に申し訳ありませんお嬢様。執事にあるまじき行為でした。言い訳する気は御座いません。どうぞ、殺すなり、抹殺するなり、惨殺するなり、暗殺するなりしてください。」

「殺すしか選択肢にないわね。いいわ、後で私の部屋に来なさい。」

「・・・わかりました。」

「ちよつと待ちなさい。話に全く付いていけませんわ。説明を要求します。」

「・・・分かったわ。まず、今回の事件の犯人は彼、十三夜鏡夜。昔の私の執事よ。」

『なっ!?!』

む？何故に驚いているのでしょうか？そんなに意外ですか？

「で、鏡夜が豹変した理由は単純に私と私の知り合いを敵に回したと知ったからよ。」

「はい、その通りです。主を敵に回す従者など、従者失格です。ですから、即刻あなた方を殺すのを止め、こういうことになったのですよ。」

「初めからそう言えば良かったではありませんか・・・。」

「なににせよ、幻想郷は安泰、と言うことでよろしいですか？」

おお、此処はパラダイスですね。今度は園児服みたいな服を着た子供が現れましたよ。良いですね、良いですね、良いですね!!

「ええ、そうよ。鏡夜が私の敵になるなどあり得ないわ。」

「その通りです。安心して下さい。」

はい、これで一件落着ですよー。ほら、皆さん帰って行きますよ。ふー、よかったよか

「ちよつと待つて下さい!!」

解決したと思った矢先の荒声。何事でしょう？

「皆さん目的を忘れていませんか？私たちの目的は、彼の捕縛ですよ！？」

「え？そうだったのですか？ですが閻魔さん（仮）。私は捕まえられませんよ？私の能力を知っているでしょう？」

「・・・いえ、知りません。」

「ふむ、知りませんか。アホですね。」

「なっ！！？」

「まあ、教えても不利も無いので教えておきます。私の能力は『情報を操る程度の能力』です。何が出来るのかは全部は教えませんが、世の中、情報で出来ています。」

「はい？」

「体の構造も、情報で知っているでしょう？実際に自分の体の中身を見たという方はかなり少ないはずですよ。ああ、レントゲンとかは無いですよ。生です。今見ている光景も脳に情報としては言ってくる初めて認識できます。私はその情報を操れるのですよ。つまり、今あなたが私を私と認識しているかもしれないませんが、それが全くの別人かもしれないことです。」

「・・・反則じゃないですか。じゃあ、何故突然現れたりできるのですか？」

「ああ、あれはまあ、頭の賢い人なら分かるかもしれないね。分かっている人、薄々感ずいている人、拳手。」

「・・・おお、割と少ないですね。加齢臭の方と、ガンキヤノンさんと、蛙の帽子を被った素晴らしき口りな方と、お嬢様、パチユリー様、あと、アポロっぽい人と、死神の方と、園児服着た素晴らしき口りな方ですか。存外、

「この土地の方々はアホなのですね。」

『何！！！？』

「息はピツタシ。されど、頭はガツカリですね。やれやれ。」
「何この人、すごくむかつくんだけど？殴っていい？ねえ、殴っていい？」

ん？巫女さん（超馬）が怒っていますよ？何故に？

「殴っても良いですが、その場合、痛いのは自分だけですよ？」
「それで苛々が消えるのなら十分よ！！」

バゴン！！

「~~~~~っ！！」

「だから言っただけですが・・・まあ、私の所為でもあるので痛みは消しておいてあげます。」

「・・・あれ？収まった？」

「ああ、今のが単純に分かりやすい私の能力です。まず、私の体の内部構造を堅くして、それをこの巫女さん（笑）が殴りました。」

「（笑）って何よ！？」

「で、巫女さん（煩）は痛いと言う情報を神経から脳に送りました。私がそれを操り、痛くないということにしたのです。まあ、ダメージは残りますが。ああ、私が発生する理由でしたね。単純なことです。私に関係のある話、もしくは噂がされている所なら、私がどこにでも行けるからです。まあ、その場合は私自身を情報にするので、留まっていられるのは良いところで一週間、普通で一晩、悪くて一時間と言ったところですが。」

「いや、私はどういった仕組みで発生するのかを聞いたのですが・・・？」

「ふむ、それは考えた事ありませんでした。なにせ、やろうと思っただけ出来たので。」

「はあ？」

はあ？と言われましてもね。実際そんなものだと思うのですよ、能力なんて。ほとんどの人がやってみたら意外と出来たみたいな感じでしょう。そんなものだと思うのですけどね。

「で、そんな私を捕まえたくても捕まえられない閻魔っばい人にとっても良い話があります。」

「で・す・か・ら！！ばいではなく閻魔ですってば！！」

「ふむ、では、閻魔（仮）で行きましょう。それで、良い話と言うのは単純明快。こんなことも思いつかない閻魔さま（仮）はとも頭が固いということは一旦置いておきまして、上の方には“私を捕まえることは不可能なので、この土地に監視する”とでも言うっておけばいいのです。」

「そ、その様なこと・・・。」

「ならば、捕まえてみますか？絶対に逃げ切ると誓いますよ？」

「・・・小町、なんとかして下さい。」

おお、遂に部下に頼りましたね。

「えゝ、無理ですよゝ。だって、彼、出鱈目なぐらい強いんですよ。あたいにはとてもとても。」

「・・・ええい！ままよ！！」

おおっと？突っ込んできましたよ？

それを私は片手で頭を抑えて止めました。

「うー！！このっ！」

手をジタバタさせて必死で私を捕まえようとしています・・・

「ふむ、悲しきかなこの身長差。まあ、私に肉弾戦を挑んでも良いですが、勝てますか？あなたが。」

「私をバカにしているでしょう！？」

「否、ただ、可愛いですねー、とは思っていますよ？」

「ななな！？」

「まあ、同時に、五月蠅いですねー、とも思っていますが。」

「五月蠅い！？」

「ま、そういうことで諦めてください。元々、私の目的はお嬢様の搜索ですので。目的を達成した今、私はお嬢様に仕えるつもりです。あ、お嬢様。」

「何？」

そうでした。まだ重大な事を聞いていませんでした。

「また、お仕えしてもよろしいでしょうか？」

「・・・ええ、許可するわ。」

「ありがとうございます。あ、そういうわけなので、もう私はこの土地を殺しませんので一件落着ですよ？閻魔さん（子）もお帰り下さい。」

「（子）ってなんですか！？まさか、子供と言う意味ですか？」

「それ以外何かあるのですか？」

「むきいー！もう怒りましたよー！！」

「既に怒っていましたけどね。」

「・・・ハア、もう良いです。疲れました。あ、そうです。言い忘れていましたが、あなたをこの土地で監視するに当たり、あなたは何らかの仕事をしなければいけません。」

「・・・それで？」

「あなたは何が出来ますか？」

「何が、と言われましても・・・、私は執事ですよ？執事しかできません。」

「では、それで。要望があつた場所の執事をやって下さい。もちろん、拒否権はなしです。期間はそうですね・・・、一週間でどうです？要望があつた日から一週間です。」

「ちよつと待ちなさい、それだと、私の執事である時間が格段に少なくなるのだけれど？」

「それはしょうがないでしょう。」

「・・・却下よ。鏡夜は私の執事なの。」

「それだと、地獄に戻ってもらう必要がありますが？」

「・・・どうやら、結構面倒なことになっていきますね。なるほど、私の罰のお話ですか。」

「お嬢様、私は別に構いませんよ？」

「鏡夜！？私以外を主とする気？」

「いえいえ、私の主は私が死ぬときまでずっとレミリアお嬢様ですよ。ですが、閻魔さまが言うように、私も私で罰を受けなければならぬようです。そうですね？」

「はい。・・・あ、今閻魔と認めましたね？」

「なら、私はその罰を甘んじて受けます。大丈夫、一週間働いた後は、一週間休みますし、最優先はお嬢様ですので。」

「・・・鏡夜がそう言うなら、それでいいわ。」

「ありがとうございます。では、解散しちゃってください。ささ、どうぞ。」

「さつきから思っていたのだけど・・・。」

『何ですつと仕切ってるの！！？』

おお、ばれました。

「息はぴったりですね。まあ、良いではありませんか。どうぞお帰り下さい。」

ぶつぶつ不満タラタラで帰って行きましたね。うん、よかったよかったです。

「咲夜、片付けておきなさい。鏡夜は付いてきなさい。」

「かしこまりました。」

さて、お嬢様の部屋に着きました。

「何も変わってませんね。」

「そうよ。あなたの部屋も、昔と変わっていないわ。」

「え？まだ私の部屋があるのですか？」

「当たり前よ。鏡夜の部屋を、無くす訳ないじゃない。あなたが居たという唯一の証なのだから。」

「・・・ありがとうございます。」

その時、突然腰の辺りに何かが抱きついてきました。小さい、とても小さい体です。

「お嬢様・・・？」

「ずっと、会いたかった。あの時、私も何か出来たんじゃないかって、ずっと思ってた・・・。」

震えていました。更に、お嬢様は泣いていました。恐らく、私が死んでからお嬢様はずっと自分を責めていたのでしょう。・・・そんなことしなくて良いのですが。

ポンッとお嬢様の頭に手を乗せ頭を撫でます。

「御自分を責めないでください。私が死んだのは私の所為なのです。」

から。お嬢様が自分を責める所ではありません。それと、私も会いたかったですよ。会うのに、200年も掛かってしまいました。」

「いい、それでも、会いに来てくれたから。」

「これからは、滅私奉公、粉骨碎身、お仕えさせていただきます。」
「ふふ、期待しているわ。」

・・・沈黙。ですが、それはあまり気まずいものではありませんでした。

「お帰りなさい、十三夜鏡夜。」

「・・・ただいま帰りました。レミリアお嬢様。」

第五話 この土地の方々は皆、個性的ですね（後書き）

お嬢様キャラブレイク？です。カリスマではありません。キャラブレイクです。

第六話 邪な考えなどありませんよ

従者の朝は早い。そう、執事、メイド関係なく朝起きる時間は早いでしょう。何故なら、主が起きたその時には、少なくとも朝食は完璧に準備しておかねばならないし、完璧で瀟洒な従者を目指すのなら朝食以外の事も主が起きる前にすべてこなしておく必要がある。無論、私とて従者の端くれ。主よりも早く起きるのは当然です。ですが、私は断言します。

私は、お嬢様が起きるまでは働かない！！

はい、と言うわけでお嬢様が起きるまでは僕は一切働きません。否、働かないのではありませんね。私はずっと、お嬢様の起きるまでずっとその傍らに立っています。理由？主が起きた時に誰も居ないと言うのは中々失礼なことではありませんか。邪な発想？あるはず無いじゃないですか。

「・・・うー。」

「クハッ！？」

か、可愛すぎますよ、お嬢様！おっと、いけない。鼻から忠誠心が。抑えるのです、忠誠心を外に放出してはいけません。

「レミ・リア・うー　うー」

「ブフツ!!?」

口から!口から忠誠心が!!くっ、お嬢様め!これは私を陥れる為の計略ですね!?!さすがお嬢様汚い!!ですが可愛い!!可愛すぎますよお嬢様!!!!この寝顔だけでもご飯三杯はいけます!!..
...じゅるり。

「何をやっているの?」

「おおっと、危ない所でした。ん?あ、咲夜殿ではありませんか。どうしました?」

「それはこっちの台詞よ。ここで何をしているの?」

「何って...お嬢様の寝顔を目に焼き付け「死になさい。」おう!?!いきなりナイフを投げないでください。ビックリするではありませんか。」

「お嬢様の寝顔を堂々と...。それが従者のあるべき姿ですか?仕事もしないで。」

「む、なら反論させていただけます。ええ、いただきますとも。むしろ、お嬢様が起きた時、誰も居ないと言つのは明らかに失礼なことでしょう。そうではありませんか?」

「それはそうだけれど、だからつてずっと見ていたと言つのは?それに、お嬢様が起きたら真っ先に私が気付くから問題ないわ。いいからさっさと仕事して来て頂戴。」

仕事...?ああ、仕事ですか。

「ご安心を。朝のお仕事は既にほぼ全て終わっています。」

「は...?さつき、ずっとここに居たと言っていたじゃない。どうやって終わらせたの?」

「ああ、そう言えば話していませんでしたね。すっかり忘れていましたよ。それは...。」

「うつ、ん……。」

おおっと、お嬢様が起床しましたね。吸血鬼なのに朝に起床とはものすごく不健康ですね。できれば止めて頂きたいのですが、お嬢様が好き好んでやっている事らしいので（昨日、パチエ様に聞きました。）それを意見するのはどうかと思ったので意見はしません。

「おはようございます。着替えをしますね。」

指パッチンして、即座にお嬢様のパジャマと私服の立場を逆転させます。ああ、私は基本、知っていれば何でもできます。情報を操るのですから、私が知っている情報は何でも操れます。つまり、お嬢様の私服がどこにあるのかさえ知っていれば、パジャマと瞬間に入れ替えることなど造作ありません！！・・・下着もまた同様です。おっと忠誠心が。いけませんね、最近と言うか昨日から忠誠心がダダ漏れになっています。困りました、困りました、困りました。

「・・・早いわね。」

「お褒め頂き恐悦至極です。朝食も用意してあります。・・・おい、レン。入ってきてちょ。」

「ちょ！？」

「分かった。」

レン・・・ああ、私の使い魔です。今は人間の形をしていますが本当の姿は確か、あれ？何だったでしょう？猫？犬？鳥？虫？否、虫はありませんね。何らかの動物だった気がするのですが・・・まあ、私も若かったので何か変なのにしたのでしょうか。覚えてませんが、まあ、とりあえず私に忠実な使い魔です。会うのはとっても久しぶりですがね。私が気まぐれに作った情報体ですから、当然、肉体は所持していますし、私が消滅しても体を維持出来る様になっています。

す。ぶつちゃけ、私よりもその辺りは頑丈に出来ています。・・・何故、レンは頑丈に出来て私自身は何故出来ないのでしょうか？あ、分かりましたよ。私と言う器・・・と言うか情報の容量が大きすぎてその辺負担するのですね。レンは強いですが、私ほどではないですし、現界が容易いでしょう。よし、スッキリ。

で、レンとは私が現界する度に接触します。お互い、どこに居るか分かりますね。そして、私は今がどういう世の中なのかを知るのです。それで、私はそれにあった噂を流せるというわけです。因みに今回はこの場所が結界に囲まれていたのでレンを呼ぶのが遅くなりました。まさか、一回分解してこちらにて再構築させる羽目になるとは思いませんでした。はい、説明終了。

「今日の朝食は、まあ、朝と言うわけで軽めの物にしました。血入りスープと普通のパン。デザートに・・・お嫌いでしょうがヨーグルトです。お飲み物は紅茶です。」

「うっ、ヨーグルトは食べなきゃダメ？」

「駄目です。しっかり食べてください。」

「紅茶には何も入って無いわよね？」

「え・・・？いや、普通に茶葉が入っていますけど？」

「そうではなくて、変な物を入れてないわよね？」

「へ、変な物・・・？ちよつと待って下さい。レン、何か変な物入れた？確か、紅茶はお前が担当したよね？」

「別に大したもの・・・あ。」

「何？」

「B型の血を入れた。それ以外は何も。」

「・・・だそうですが、何か問題はありませんか？」

「いいえ、無いわ。むしろ完璧よ。」

そう言って紅茶を飲むお嬢様。実に満足そうです。

「・・・美味しいわ。」

「美味しいですってよ、レン。良かったですね。」
「・・・・・・・・。」

あ、相変わらず私以外にはツーンとしていますね。まあ、良いでしょう。

「では、私は少し用事があるのでこれにて。レン、行くよ。」
「うん。」

一礼して部屋を出ます。数歩歩いた先に・・・

「咲夜殿？」

「・・・あなた、いつの間に朝食なんて作ったの？」

「レンとの共同作業ですが、そうですね・・・、日が昇る前には作り終わりました。それがどうかしました？」

「・・・あなた・・・いえ、鏡夜、鏡夜は・・・いつ眠ったの？」

「睡眠ですか？私は睡眠など取っていませんよ？」

「え？」

「睡眠は必要とする体ではないので、睡眠は取っていません。」

「・・・なら、その間ずっとお嬢様の傍に？」

「？そうに決まっているではありませんか。」

「・・・そう。」

???おかしなことを聞く咲夜殿ですね。そんな当たり前の事をどうして聞くのでしょうか？

「では、用事があるので。あ、悪いですが食器、片付けて貰って良いですか？」

「分かっているわ。実質、今日はまだ何もしていないわ。むしろ、

これ以上仕事を取られても困るのだけど？」

「ふむ、それもそうですね。では、またいつか分担でもしましょう。では。」

目指すは大図書館です。もちろん、お飲み物も持っていますよ。あと、カロリーメイトも。

「・・・狂ってるわね。良い意味でも悪い意味でも。」

後ろで咲夜殿が何か言っていました。生憎聞きとれませんでした。

「ここは相変わらずすごいですね。」

現在、私とレンは大図書館内部に居ます。

久しぶりに（当たり前前か）来てみましたけど、昔よりも増えていますね、本の量が。というか、埃っぽいですね。こんな環境に居るから喘息が直らないのではないのでしょうか？

「・・・鏡夜。」

「うん？」

呼ばれて見たのでそちらを見てみたらレンがうつうつもじもじしていました。・・・ああ、そういうことですか。

「私が許可を取ってくるから、読みたい本読んできても良いよ。」

「うん・・・！」

タタタツと本に小走りでも嬉しそうに向かって行きました。確か、レンは本が好きでしたね。

「さて、パチエ様はどこでしょうか・・・？」

うーん、いませんね。本当にどこに居るのでしょうか？ここは広過ぎです。

「・・・ゆ。」

「・・・ん？何か聞こえましたよ？」

良く耳を澄ましてみます。

「むきゅ・・・。」

この声は間違いない！パチエ様です！下の方から聞こえましたよ？と、そこで私の眼に映ったのは、不自然にこんもりしている本の山です。まさかと思い、それを崩していくと・・・。

「むきゅー。」

パチエ様が下敷きになっていました。

「大丈夫ですか？」

「あ・・・鏡夜？死ぬかと思ったわ・・・。」

「取り合えず、出しますね。」

「お、お願い・・・。」

そんなこんなで、パチエ様を救出しました。

「で、どうしてあのようなことに？」

「読んで積み上げた本たちが一気に落ちてきたのよ。ホント、危なかったわ。」

「いや、片付けしようよ……。」

先ほども言いましたが、だから喘息が治らないのではないのでしょうか？

「それは小悪魔の仕事よ。私のやることでは無いわ。」

「それでも、少しぐらい片付けましようよ。そんなことでは、小悪魔殿がやさぐれてしまいますよ？」

「うつ……あ、そ、そう言えば鏡夜は何故ここに来たのかしら？」

「話を思いっきり逸らしましたね。まあ、いいです。お飲み物をお持ちしました。何が良いですか？コーヒー？紅茶？緑茶？種類は取り揃えてあります。」

「紅茶が良いわ。」

「おや、コーヒーは飲まないのですね。」

「ええ、苦いもの。」

「あの苦味が良いのですが……まだお子ちゃまな舌ですね。」
「なっ!？」

「そんなお子ちゃま舌なパチエ様には私からミックスフルーツジュースをプレゼントです。」

「要らないわよ!!それにお子ちゃま舌って何!?コーヒー飲めないのがそんなにいけない事なの!!!？」

ピーピー五月蠅いですね。

「因みにミックスしたのはドリアンとパイヤ、パッションフルーツです。」

「なんで臭いフルーツばかりなの！？余計要らないわ！！」

「あ、そうですか。では普通にドリアン入り紅茶でも。」

「ありがとっていやいや！普通じゃないわよ！？ドリアンが入ってる時点で普通じゃないわよ！！？」

「おや？まさかパイヤをご所望ですか？通ですね。」

「どこからその結論が出たの！？所望していないわ！！」

文句が多いパチエ様ですね。いつからこんなに我儘になってしまったのでしょうか？私はとても悲しいです。

「鏡夜……。」

「ん？ああ、レン。どうかした？」

「喉渴いた。」

「これでも飲みます？」

渡したのはミックスジュース。

「……臭い。」

「味は？」

「……ん、おいしい。」

「でしょう？あ、パチエ様は紅茶でしたね。……どうぞ。」

「さつきとは随分違うわね……。まあ、ありがとう。ところで。」

「なんででしょう？」

「その子は誰？」

「レンですか？ああ、私の使い魔……。いえ、子供ですね。」

その瞬間、パチエ様は本を落とし、私の背後からはガシャーンと何かを落とした音がしました。後ろを見てみると……

「あれ？お嬢様？」

「・・・鏡夜、今の話、く・わ・し・く！説明なさい。」

「は・・・？」

「そうね鏡夜、『子供』とはどういう意味なの？」

子供・・・？ああ、そういうことですか。

「レンは私が作った使い魔なので、世間的に子供という事にしてあります。お嬢様とパチエ様が危惧している事は一切ございませんね？レン？」

「うん。鏡夜はお父さん。」

「ね？」

「・・・要するに、そのレンとやらは鏡夜の使い魔で良いのね？」

「はい、その通りです。」

「分かったわ。鏡夜の使い魔なら歓迎しない訳にはいかないわね。よろしく、レン。」

「・・・」

またツーンとしてますね。

「すみません、レンは何故か私以外にはこうなんです。どうかご容赦を。」

「・・・まあいいわ。それより」

「おはようございます！！清く正しい射命丸文です！」

おや？何時ぞやのあややさんですね。どうしたのでしょうか？

「あら、ブン屋じゃない。咲夜は何しているのかしら？侵入を許すだなんて。」

「いえ、お嬢様。どうやらそのブン屋は鏡夜に用事があるようでしたので招き入れました。よって、侵入された訳ではありません。」
「そう、で？用事って何かしら？」

お嬢様、それは私の台詞です。

「鏡夜さんに早速お仕事ですよ。場所は地底ですが。」

「仕事？ああ、あの出張執事ですか。もう来たのですか、ていうか、何故あなたが私に報告してくるのですか？」

「あ、申し遅れました。私は今日から閻魔さまにあなたの仕事についての報告を任せられたのです。これからは私が報告させていただきます。よろしくお願いします！」

「ええ、よろしくお願いしますね。」

営業スマイルならぬ執事スマイルで対応します。

「つ、で、では今回の執事としてのお仕事の説明をさせていただきます。今回の依頼主は古明地さとりさんという地霊殿の主です。内容は・・・ペットのお世話、仕事の手伝い、朝、昼、夕の食事準備、後は身の回りの世話ですね。」

「なるほど、把握しました。で、いつからですか？」

「ええつと、それは・・・あ。」

「はい？」

「今日から、です。」

事はいつも突然ですね。

第七話 人をからかうのは私の趣味です

ふむ、あ、どうも皆さん、鏡夜です。困ったことに地霊殿とやらに今からお仕事の様です。いやはや、この土地・・・幻想郷でしたか？ここはアレですね。理不尽と言うか、何と言うか。

「きよ、今日ですって！？いくらなんでも急過ぎるわ！！」

はい、急過ぎます。ですが、まあこれも私に課せられた義務ですから、地獄の良いなりとは少し癪・・・いえ、はらわたが煮えくりかえるほど癪ですが、仕方ないでしょう。

「お嬢様、申し訳ありませんが、ちょっと行ってきます。」

「鏡夜！？」

「これは私の義務です。お嬢様の元でお仕え出来ないのが大変心苦しいですが、私がこの土地に残るためにも、必要なことですから。ですが、私の優先順位は常にお嬢様がぶつちぎりのトップですので、何かありましたらそうですね、私の話でもしてください。すぐに駆けつけますから。ええ、それはもう、刹那の如く、突風の如く、脱兎の如く。」

「・・・鏡夜がそう言うなら良いわ。でも、一つだけ言わせて。」

「何でございましょう？」

「脱兎は違うわよ！逃げてどうするの！！」

「おお、時間差ツッコミですか。大して面白くもなんともないですね。」

「悪かったわね！！」

ブイツとそつぽを向いてしまいましたよ。拗ねてしまいましたか。ふむ、よいしょしてみましよう。

「冗談ですよ。斬新で、私の度肝を抜きました。」

「それはあまりのつまらなさにかしら？」

「はい……。いいえ、その様なことは御座いませんよ？」

「今『はい』って言ったわよね？ねえ、言ったわよね？」

「何のことでしょう？私にはお嬢様が何をほざいているのか全く分かりませんが？」

「所々失礼ね！！？礼儀はどこにいったのよ！！！！！」

「……。あ、そろそろ時間なので私はこれにて。」

「待ちなさい！何一つ処理せずにどこかに行こうとするんじゃないわよ！！！」

「分かりました、一つだけ処理していきましょう。お嬢様、私が先ほど言ったことは全て嘘です！！」（ドヤ）

「ドヤ顔で言う事じゃないわよ！！！」

「よく考えてください。全て『嘘』なので、つまり、面白くなかったという事も嘘なので、面白かったと言う事ですよ。」

「……。え？」

「では、行つて参ります。私が居ない間も、好き嫌いはしてはいけませんよ？」

「え、ええ……。」

「失礼します。」

一礼し、執事スマイルで退室します。

「……。あれはずるいんじゃない？」

「ずるいわね。」

「ずるいですね。」

「あ、鏡夜さん！待ってくださいーい！」

現在、私は地底とやらに向かつて移動中です。メンバーは私、レン、そしてあややさんです。案内役らしいですよ。私には必要無いのですがね。私の噂、話をしているところには瞬間的に移動もとい発生できるので。・・・まあ、噂されてなければ意味無いものですけどね。しかも噂されているかされていないかはなんとなくわかるだけでものすごくアバウトです。戦闘面ではこの上なく強い能力なのですけど、生活面ではあまり役に・・・立たないことも無いかもです。

「ここです。」

「・・・神社？」

どう見ても神社です。何々？博霊神社？ああ、あちらの世界にもありましたね。ものすごく古ぼけてましたけど。ですが、良い隠れ家でした。私が発生すると、死神が五月蠅いのですよ。千切つては投げ千切つては投げを繰り返してましたよ。・・・あ、比喻ではなく真面目にです。

「とりあえず、上がりましょう。」

「階段をですか？めんどいですね、飛べるのなら飛びましょう。・・・

もしかや、ダイエットですか？」

「違いますよ！女性にそういう事を言うてはいけません！！」

「まあ、その必要は皆無ですね。レン、おいで。」

「ん。」

レンを抱き上げ、そのまま跳躍で階段の一番上まで跳びます。この

ぐらいなら、跳ばずとも余裕ですね。因みに何故抱き上げたと言うと、単純に私の趣味ですが何か？

「あやさん、早くして下さい。」

「あ、待って下さい！！」

全く、遅いですね。いや、脚は速いのですが、こう、脳内の状況整理からの行動が。

「で？どこから行くのですか？」

「あ、あの穴からですか？成程、では早速」

「・・・鏡夜。」

「ん？何かな？」

「・・・お参り、したい。」

「ん？お参り？いいよ、はい、五円玉。」

「ん。」

私から五円玉を受け取り、テッテッとお賽銭箱に小走りで走っていくレン。うん、和みます。

「・・・あの子には随分甘いんですね？」

「そりやそうですよ。長い付き合いですし、何より、私が創った最初で最後の子供ですよ？甘やかしますし、可愛がりますよ、全力で。」

「」

「ゆとりの極みですね！！？」

「何をおっしゃいます。レンは良い子ですから、私が甘やかしても何も問題ありません。むしろ、今まで碌に構ってあげなかった分、今存分に構ってあげるのですよ。」

「・・・鏡夜、終わった。」

「ん？終わった？じゃ、行こうか。」

「ん。」

「あ、あややさん。ここまでありがとうございました。これからもよろしく願いしますね？」

割と誠意をもつてお願いしています。執事スマイル付きですが。

「は、はい、よろしくお願いします。」

「では。」

穴に向かってダイブします。・・・おお、思ったよりも深いですね。

「・・・・・・・・あの笑顔は反則ですよ。」

ふむ、深い。そして不快。なんですかこのレンの教育上よろしくない気配は。まったく、これでレンが悪い情報を体内に取り込んでグレたりしたらどうしてくれるのです。地底を殺しちゃいますよ？レンの害になる物はすべてが削除対象です。

「・・・・・・・・ここ、やだ。」

「ああ、大丈夫？こんな悪質^{タチ}な情報は体内に取り込んだじゃダメだからね？私の悪性情報^{タチ}ぐらい性質が悪いからね？」

「ん。」

よし、これで良いでしょう。あ、もう予め言っちゃいますけど、私

は子煩悩ですからね？親バカですからね？子供のためなら割と何でもしますからね？

「・・・レン、思った。」

「何を？」

「落ちる必要、ある？」

・・・無いですね。ぶっちゃけ、神社まで歩いてきたのもあややさんが居たからです。私の発生は、他人を巻き込みませんからね。まあ、私が居るところに呼ぶことは可能ですけど、その場合は、その呼ぶ人がどこに居るか正確に理解してはいけません。緯度経度、部屋のどこに居て、ドアから何メートル離れているかなどなどを正確に。使えません。話を戻して、あやさんが居たから歩いたのであって、レンとなら発生出来るのです。レンはちよつと珍しいタイプでして、複数の能力を持っています。その中に、『適合する程度の能力』と言うものがあります。これ、戦闘面では全く役に立ちませんが、全くではないですね。生活面ではとても便利でして、その気になれば、火星だろうと、水星だろうと、太陽だろうと適合してしまえば、その環境に合わせて生きて行けるようになります。ですが、そのためにはその環境の情報を取り込み、適合しなくてはいけなくなります。ですから、私はさっき『取り込むな』と言ったのです。まあ、こんな環境に適合する必要も無いのです。伏線回収です。いえーい。で、その能力で私に適合して、見事に私と共に、噂の現場に発生出来るわけです。因みに、レンの能力は複数と言いましたが、その中には『情報を少し操る程度の能力』もあります。無ければ、『適合する程度の能力』なんて宝の持ち腐れですからね。

「じゃあ、とつとと地霊殿とやらに移動しますか。レン、行くよ？」
「うん。」

噂は・・・されてますね。内容は・・・あ、遅刻らしいです。ではドロン。

「おはようございます。十三夜鏡夜、只今参上いたしました。」

おお、驚いてますね。まあ、当然目の前に現れれば驚くでしょう。前触れ無しですから。ドロンと言いましたが、実際煙など出ていませんし。

「・・・お待ちしていました。ずいぶん遅かったですね？」

「道中が歩きでしたので。文句のほどは責任者に言っていただけると助かります。」

「わかりました。射命丸さんにそう言っておきます。」

「では、まず自己紹介から、私の名前は先ほども言ったように十三夜鏡夜。年齢300歳ぐらい、趣味、お嬢様にお仕えすること、子供を愛でること、レンの行動を観察すること、人をからかうこと、特技、関数計算が暗算で出来る事、パソコンよりもハイスぺ」

「ちょよ、ちょっと待って下さい！誰もそんなこと聞いていませんよ！？」

「・・・あ、私としたことが大変失礼いたしました。」

「いえ、分かっていただけなら」

「私のスリーサイズは」

「そんなこと聞いてませんよ！どう解釈したらスリーサイズを言う結論に至るのですか！？」

「違うのですか？」

「私の事を何だと思ってます？」

「なら、あなたのスリーサイズを。」

「ななじゅ 何言わせているのですか！セクハラですよ！」

「言う方も言う方だと思います。」

「つ、た、確かにそうですね。少し落ち着きます。」

「・・・ふむ、78ですか。」

「何で知っているんですか!？」

「え?何のことでしょう?私は唯、78と言っただけなのですが?」

「あっ・・・。」

「まあ、良いものではありませんか?78、可もなく不可もなく、普通ですよ?」

「やっぱり確信犯ではありませんか!！」

「え、今更ですか?」

「(この人マジむかつきます・・・!!)」

「・・・鏡夜、話が進まない。」

おおっ、危ない危ない。弄るのが面白過ぎてつい遠回りしてしまいました。

「では、おふざけはこの辺りにしておきましょう。御主人、早速仕事をしたいのですが、どうすればよろしいですか?」

「え、あ、はい。とりあえず皆に紹介したいので、客間に場所を移します。」

「分かりました。そこで、私の取り扱い方でも説明させていただきます。」

くさとりく

彼は変わった方ですね。初めて会った時の印象とは全く別人のようです。いえ、アレが素なのでしょうか?

それにしても、彼は人をからかうのが好きなようですね。フッフ、そうはいきません。私もからかうのは好きですが、からかわれるの

は嫌いです。先ほどはやりませんでした。次は能力を使って逆に
からかってあげましょう。・・・突然真面目になるのも素なのでし
ょうか？

（鏡夜）

客間です。紅魔館に勝るとも劣らないですね。さすが地霊『殿』で
す。

「では、まずはこちらから。改めて、この度あなたにお仕事をお願い
した、古明地さとります。こちらは私のペットで・・・。」

「火焰描燐だよ。よろしくねお兄さん。気軽に燃つてよんでね。」
かえんびょうりん
れいとうつほ

「霊鳥路空だよ！！皆はお空って呼んでるよ！」

「です。あ、お仕事の項目にペットのお世話とありましたが、当然
お燐とお空の世話してもらうのでよろしくお願いします。」

「分かりました。・・・成程、火車と地獄鴉・・・ん？ああ、八咫
鳥もありますね。はい、よろしくお願いします。ではこちらにも改め
て、十三夜鏡夜です。で、こちらが・・・。」

「・・・。」

おやおや、ツーンとしちゃってますね。困りました。」

「せめて、自己紹介はしてくれないかな？ほら、カタカナ二文字だ
よ？」

「・・・レン。」

「です。・・・あ、種族は言った方が良いですか？先ほどは私が勝
手に調べてしまいました。あなた方は分からないでしょう？」

「うにゅ？お兄さん人間じゃないの？」

「人間の匂いがするけど。」

「おお、人間に見えますか。それは重量。ですが、すみません、人間ではありません。そもそも、私の事についてあのちっこい閻魔殿から聞いているでしょう？」

「ちっこい……。」

ん？御主人が下を向いてプルプル震えていますよ？笑っているのでしょうか？

「そう言えば、そうだね？」

「うにゅ？話？なんの事？」

・・・ああ、そう言えば、まとめて言ってしまうえばこの人は鳥でしたね。つまり、鳥頭と。

「まあ、どうやら頭の弱い方もいらっしやるようなので、簡単に言うてしまうと、私は情報体です。この体は情報の塊と言いますか、何と言いましょね。魂を見た事ありますか？」

「あります。」

「あるよ。」

「おいしいの？」

・・・あるとしましょう。

「あの状態から、昔の私の姿形を一から再構築したので、この肉体は私が作り上げた情報体です。まあ、人間の肉体なので強靱ではありません。・・・今は、ですけど。」

何と言えば良いのでしょうか？サイボーグとは違いますし、人造人間でもありません。・・・情報統合思念体を人型にしてみたという

感じでしょうか？違いますね。まあ、肉体があるので、生き物と言うジャンルで問題無いでしょう。

「で、レンと言いますと、私が作ったので情報体でもいいのですが、ちよつと違いますね。一からではないので。種族としては、情報体&合成獣^{キメラ}です。今は人の形をしていますけど。・・・ところで、レンはなんのキメラでしたっけ？」

「・・・分からない。」

「自分の事なのにですか!？」

「ふむ、まあ、そんなものでしょうね、私達など。では、自己紹介も終わった・・・あ、まだですね、そちらの方の自己紹介が終わってません。」

ピツ、と客間（と言ってもかなり広いです）の柱を指さす。レンと私以外気付いてないようでしたが、どういう事でしょう？

「なつ、こいし！何時帰ってきたの？」

「あちゃー、ばれちゃったか。すごいねお兄さん。え？何時帰ってきたか？さっきだよ、お姉ちゃん。」

どうやら姉妹のようですね。

「ふむ、『こいし』と『お姉ちゃん』という単語から、あなたは古明地こいしですね？はい、分かりました。では、早速本題に」

「ちよつと待つて。何でお兄さん、私に気付いたの？」

「なんですか？・・・では、逆にお聞きしますが、あなたは何か特別な事をしていたのですか？ただ普通に扉から入り、その柱にもたれただけの様に私は思いましたが、レン、どう？何か感じた？」

「・・・ん、能力。」

能力・・・能力ですか。

「能力ですか。分かりました、では、早速本題に」

「だからちよつと待っててば！何で私に気付いたの？普通は気付けないだけだよ。」

「なら、普通ではないのでしょうか。では、早速本題に」

「私の能力は『無意識を操る程度の能力』。ねえ教えてよ、何で私に気付けたの？」

・・・中々本題に入れません。この娘はどうやら、興味関心のある事は積極的に聞くようですね。まあ、良い事ではありませんか？

「無意識を操る、成程、ならば効きませんよ。私に無意識などありませんから。」

「嘘！生きているなら絶対に無意識はあるはずだよ！！」

「・・・ま、そうでしょうね。ですが残念、私は既に死んでいますし、普通でも無いんです。諦めてください。」

無意識が無い、分かりやすく言ってますと、パソコンが無意識のうちに何かしますか？否、しません。全てがプログラムされています。・・・まあ、ウイルスに侵されたらどうかは知りませんが。私も、それと同じです。ああ、全てがプログラムと言うわけがありませんよ？しっかり意識があり意思もあります。しかし、常に稼働状態、無意識などあるはずがない。無意識、意識していないと言う事はつまりスリープ状態です。常に稼働している私はスリープにはなりません。

「では、そろそろまじめに本題に入ります。まず、私の取り扱い方ですが、これが最も大事です。良いですか、よく聞いてください。」

皆さんを一瞥してから、ゆっくりその言葉を口に出す。

「私に、殺意を向けてはいけません。」

第八話 地霊殿でのお仕事です

「私に、殺意を向けてはいけません。」

ええ、向けてはいけません。絶対に。自殺願望があるのなら別ですけど。

「・・・何故ですか？」

「そうですね・・・、詳しくは話せませんが、私の境遇が影響しています、どうやら殺気を当てられると自動的に何故か殺してしまうのですよ。と言っわけで、殺気は当てないでください。それと、御主人・・・で、良かったですか？さっきからずっとそう呼んでいますけど。」

「御主人・・・微妙ですね。お嬢様では駄目ですか？」

「私がお嬢様と呼ぶのは、過去でも未来でも一人だけです。」

「残念です。では、皆が言ってるようにさとり様で良いですよ。」

「了解しましたさとり様。ああ、それと、確かさとり様の能力は『心を読む程度の能力』でしたよね？」

「ええ、そうですね・・・。」

「大変便利な能力です。」

「え？」

あれ？何を驚いているのでしょうか？心が読める、これ以上ないほど便利な能力だと思いますけど。執事にとっては。

「便利な能力ですが・・・私には絶対に使ってはいけませんよ？情報過多で廃人になってしまいます。理由、要りますか？」

「お願いします。」

「了解しました。私は、今は肉体を保持していますが、元々は私の能力によって作り上げたモノです。私の能力は知っていますよね？つまり、情報によって作り上げたわけですから、当然この体は肉で出来ているのと同時に情報の塊でもあります。そんな体で出来た生き物の考えを読んでみなさい。私も能力がら、さまざまな事を高速で思考していますが、それも助長して、あなたが私の心を読んだ瞬間、本当に、さまざまな事があなたの脳に入ってきます。ですから、止めてください。私は、お嬢様のお知り合いの方を傷つけたくも、廃人にしたくもありません。」

「・・・分かりました。予め言っていただき、ありがとうございます。」

「まあ、そういうわけで、私の事はからかえませんか？残念でした。」

「なっ！」

「では、最後に一つだけ。あ、忠告ではなく質問ですが、よろしいですか？」

「ええ、良いですよ。」

「では、さとり様は随分と凶悪な化け物をペットにしてらっしゃいますね？私、来た時にビックリしましたよ。あんな凶悪な「止めてください。」」

ん？なんでしよう？

「私のペットは皆家族です。そんな風に言わないでください。例えばあなたでも許しませんよ。」

なるほど。皆、家族ですか・・・。

「これは失礼しました。私としてもあれは飼っているとは少々驚い

てしまいまして。分かりました。あれもあなたの家族として扱います。食事はどうしますか？」

「力の強いペットは基本的に自分で食事をしているので・・・まあ、私が作っているんですけど、人型になれないペットの食事をお願いします。」

「あなた方の食事はいいのですか？作りますよ？」

「いえ、私の楽しみの一つでもありますので・・・。」

「ですが、一時的にとはいえ、主に食事を作らせるのは執事である私の何と言いますか、プライド的なものが許せません。せめてお手伝いくらいさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「それなら大歓迎です。」

よかった・・・。なんとか執事の沽券は守られました。

「フフフ。」

「なんででしょう？」

「いえ、存外、子供っぽい所もあるのですね？意地になったりして。」

「なっ・・・。」

こ、子供っぽい・・・？そんなこと言われたのは初めてですね。

「はい、一本取りましたよ。」

「・・・フフ、一本取られちゃいましたね。やられました。」

ふむ、初めはお嬢様の元を離れるなど苦痛の極みでしたが、存外、楽しめそうではありませんか。

「では、お仕事は何時から始めましょう？」

「そうですね・・・今からお願い出来ますか？」

「それはさとり様の御命令とあらば今すぐにもやってまいります。
じゃあ、レン、いくよ。」

「うん。」

「よろしくお願いします。」

「いえ、当たり前事です。」

早速、執事を始めますか。まずは・・・、

「レン、さとり様のペットに食事、出来る？」

「ん。」

「じゃ、お願い。」

「ん。」

私は掃除ですね。屋敷の隅から隅まで掃除しますよ。それらをさつ
さと終わらせて、さとり様の身の回りの世話及び、食事の手伝い、
身の回りの世話、入浴の準備、身の回りの世話、就寝の準備、身の
回りの世話、そして、お目覚めになるまでずっとお傍にいますと言
う仕事が残っています。え？身の回りの世話が早い？いやいや、そこ
に素晴らしいきようじやふんげふん！子供が居ると言うのに世話し
ないのはあり得ないでしょう？私は子供が好きですよ？

「ま、それは良いとして仕事、しましょうか。」

ふむ、思ったよりも片付いてらっしゃる。さとり様は家庭的と見ま
した。・・・あ、ですが、細かいところまではさすがに出来ていま
せんね。やはりあの小さい体でこの結構大きい地霊殿の隅々まで掃
除するのは大変ですよ。よくまあ、今までやって来れたもので
す。大体、あの能力の所為で結構恐れられているようです、色々
な方から。恐れられていないにしても、苦手としている人はたくさ
んいるでしょうね。唯一苦手ではなく、恐れてもいない人と言えば、

此処にいるペットたちではありませんか？私ですか？恐くもありませんし、苦手でもありませんよ。自分は心を読まれないから？否、否否否。自分だけ安全地帯にいるから安心？それも否。断じて否ですよ。そもそも、何故心を読まれるのが嫌なのですか？自分がやましい事を考えなければ良いだけでしょう？それに、読めてしまう方もそれはそれで大変だと思います。人の悪意も、全て読めてしまうのですから。それなのに、今までよく心を閉じずに生きて行けたね、さとり様は。純粹の尊敬できます。

「・・・っと、思考に浸かり過ぎましたね。」

「どうですか？順調ですか？」

おっと、さとり様が背後にいたようです。思考に浸かり過ぎて気付けませんでした。迂闊です。

「どうしたのですか？何か考えていたようですが。」

「いえ、何でもありません。」

「言ってください。主命令です。」

「権力乱用ですね。まあ、それを言われてしまったら言うしかありませんね。さとり様の事を考えていたのですよ。」

「私の・・・事ですか？」

「ええ、これから、どのように身の回りのお世話をしようかと言う事で頭がいつぱいです。」

「ななっ」

「はい、一本。」

フッフ、本当にからかい甲斐がありますね。

「だ、騙しましたね!？」

「いえ、実際、数分はその事について考えていました。残りの数分

は何を考えていたか秘密です。」

「何故ですか？」

「それも秘密です。さて、掃除も終わりましたし、次はさとり様のお世話ですね。」

「っ、な、何をする気ですか？」

え、何って、もちろん・・・

「さとり様にもお仕事があるのでしょう？その手伝いや、お飲み物を入れたり、おやつ持ってきたり色々ですが・・・もしかして、お着替えを手伝ったりするとか考えてました？」

「っ！？」

おー、見事に赤くなりましたね。林檎みたいです。

「さすがにそこまではしませんよ。まあ、お嬢様のお着替えは手伝いますけど。」

「レミリアさんは鏡夜さんに手伝ってもらっているのですか？」

「ああ、別に直接脱がしている訳ではありません。そうですね・・・レンー？ちよつと良いかな？」

偶々私たちの近くの廊下を通っていたレン。都合が良いです。

「何・・・？」

「ちよつとじつとしていてね。」

「？」

今のレンの服は真っ黒。白い髪と見事に相反していますが、それもまた似合っています。と、自慢話はこのまでにして、早速指パッチンします。

「あ・・・服。」

真っ黒から真っ白にしてみました。うん、似合う似合う。

「どういう仕組みですか？」

「あー、はい、えっとですね、私の能力は小難しいこと考えず分かりやすく言ってしまうと、知っている事ならある程度、何でも出来ると言う事です。で、今回は私はレンの服はどこに入っていて、どんな配置なのかを知っていたので、レンの着ている服と、その仕舞ってあった服を瞬間的にチェンジしたわけです。分かりました？」

「・・・色々ツツコミたいところもありますが、理解はしました。それらは、知っていなくてはいけないのですか？」

「ええ、割と細かいところまで。まあ、これは瞬間移動にも使えます。今のところ瞬間移動できるのは地霊殿と紅魔館だけですけど。緯度経度をしっかり理解していれば、何らかの物と私を入れ替えて瞬間移動します。それ以外の方法だと、緯度経度理解したうえで、噂されないと瞬間移動できません。こちらの方は物は要らないのですが、条件が難し過ぎるので基本前者を多用します。」

「そうですか。御説明、ありがとうございます。」

「いえ、さとり様の頼みですからね。答えられる事には極力答えます。」

「・・・では、好きな女性のタイプ」お嬢様です。」・・・。」

「また一本ですね？」

「・・・そのようです。」

あー、本当に楽しいですね。

「まあ、少し真面目に答えるとしたら、そうですね・・・家庭的な女性は割と好感が持てます。紅魔館で言う所の咲夜殿でしょうか？」

「そうなんですか？ てつきりそういのには興味が無いのかと思っ
ていました。」

あ、因みに喋りながらもちゃんと職場に向かって前進しています
よ？ 掃除が終わったと言うのにその場にずっと留まり続けるのは時
間の無駄ですから。 レン？ ペットと戯れに行きましたよ。

「興味はあまりないですよ？ ですが、『あえて』言うのならそうい
う方と言うだけです。 私のタイプはお嬢様オンリーです。 この壁は、
発泡スチロールの剣でも軽く突き破りますよ。」

「意外と脆いですね！？」

「失礼、間違えました。 私の忠誠心はそんなもんではありません。」

「で、ですよね。」

「紙の剣でした。」

「さらにランク下げてきた！？」

「失礼、噛みました。」

「嘘ですね。」

「噛みまみゆた。」

「嘘じゃない！？」

「神は死ね！！」

「物騒なこと言わないでください！」

・・・噛んだのは本当なんですよ？ 実際は紙の剣では無く、神の剣
と言いたかったのですから。 神は死ね？ 本気ですか。 クソつたれな
『ピーー！！』なんて滅べばいい！

「ここです。」

どうやら着いたようです。 扉を開けると・・・

「あ・・・鏡夜。」

「レン、準備していたの？偉い偉い。」

頭を撫でてあげます。

「ん・・・。」

気持ち良さそうに目を細めてますよ。可愛いですね、可愛いですね、可愛いですね！！！！

おっと、危ない。忠誠心が。

「・・・どうしたのですか？」

「いえ、忠誠心が体から飛び出して表に出ようとしていたので抑えつけているところです。」

後頭部をトントンします。

「？よく分かりませんが、彼女・・・えっとレンさんでしたか？」
「・・・・・・・・。」

ツ、ツーンとしてますね・・・。

「ええ、そうですよ。」

「レンさんがこれを用意してくれたんですか？」

「まだ淹れてはいませんが、茶葉とお湯、容器、それとお菓子を用意したのはレンですね。」

「・・・すごいですね。お菓子も美味しそうです。」

フフン！レンは優秀さんですからね！

「では、さとり様は仕事をしてください。私は紅茶の準備をします。あ、紅茶で良かったですか？」

「できればコーヒーが良かったのですが、構いませんよ。」

ふむ、コーヒーですか。

「任せてください。コーヒーなら私が常備しています。すぐに用意します。」

「ありがとうございます（何故、常備？）」

「砂糖は淹れますか？」

「お願いします。」

「チツ・・・了解です。」

「ちよつと待つて下さい。何故今舌打ちをしたんですか？」

「そんなこと、していません。」

「嘘です。私はしっかり聞いていました。『チツ』って言いましたよね？」

「・・・ハア、あー、はいはい、言いましたよ。それがなんスか？」

「ダメなんスか？」

「態度悪！？」

「失敬、ちよつと悪乗りしてしまいました。舌打ちした理由ですが、単純に砂糖が無かったからです。ミルクならあるのですが・・・。」

「ミルクでもいいのでグレ無いでください。不似合いです。」

「・・・まあ、私もやっていて反吐が出そうでしたが。」

やさぐれは良いでしょうか？やってみましょう。あー、そうですね。どうせ私なんて砂糖も常備していないダメ執事ですよ、ケツ！・・・喉に酸味が昇ってきましたね。

「私はやはりこちらの方が性に合ってますね。」

「そうですね。それでいてください。・・・では、私は仕事をします。」

「

そう言つて書類？にサインやらなんやらをするさとり様。さて、私はコーヒ―を淹れてと。

「どうぞ。」

「はい。」

「熱いのでお気を付け下さい。」

「はい。」

さて、私は、ちょっと私用で出かけてきますか。

「失礼します。」

私用と言つのは当然砂糖です。少しでもいいので買っておきたいです。・・・が、率直に聞きます。

この土地に砂糖って売っていますか！？

人里を見たところ、文化は江戸時代辺り、もしくは安土桃山？まあ、そこら辺であり、砂糖が普及しているかどうかすごく心配です。・・・いや、待つて下さい。確か甘味処とありましたね。なら心配ないでしょう。売ってますよ。

と言つ事で早速町？へ。

「すみません。この辺りで砂糖が売ってある所は無いでしょうか？」
「ん？確かあの店で売っていたぞ。」

「ありがとうございます。」

「まあ、待て兄ちゃん。折角だからうちの店でも何か買ってきてくれよ。」

「ふむ、酒屋さんですよね……。」

まあ、私もお酒は好きですけど……、まあ、買ってみましょうか。

「では、その神殺しという「神殺しはあるか？」酒を……。」

ん？

「なんだい？あんたもこれが欲しいのか？」

「欲しいと言うか買うのですけど。」

「……見たところ、唯の人間じゃないか。人間にこれは飲めないよ。」

「そうですね？なら……、店主、ちょっとこのお酒、飲ませて頂いてもよろしいでしょうか？」

「買ってくれるんなら良いぞ。」

「では……、ンク、ふむ、度数は高いですけど、中々美味しいではありませんか。」

「……驚いたねえ。唯の人間じゃなかったか。あんた、名前は？」
「私の名前ですか？十三夜鏡夜です。」

「私は星熊勇儀だよ。鏡夜って言ったかい？あんた、中々いける口と見た！ちよつと私に付き合いな！」

「はい？」

「さあ、行くよ……！」

え、あ、ちよ、待つてくだ　　って、力強いですね！？

「おっと、鬼に力で抵抗してくるなんてやるじゃないか！でも負け

ないよ!!」

・・・私の能力は、情報を操る程度の能力。筋力などいくらでも上げれますし、誰にも負けないと思っていましたが・・・。

「ほら!!!ぐずぐずしないでさっさと行くよ!!」

何故でしょう?この人には勝てる気がしません。

第九話 子供は人類の宝。異論は認めませんよ

「・・・プハ！・・・そろそろ良いですか？」

「何言ってるのさ！　これからが本番だよ！！」

あ、皆様方、どうも鏡夜です。ただいま鬼の勇儀殿に捕まり、飲み比べをしている最中です。仕事中に何酒飲んでんだよと、心の中で突っ込んでくれたあなた。私もそう思います。ですが、考えても見てください。鬼に捕まっているのですよ？逃げられますか？　否、逃げられません。力が強すぎます。あの山をも崩すと言われている力で拘束されてみなさい、本当に動けませんから。私の能力でも対抗できない力ってどれだけ強いのですかと、問いたいところですね。能力が関係していそうですけど。

「さあ、もう一杯！」

もう一杯って、もう酒瓶で床が見えないぐらい覆い尽くされていますけど？むしろ、これだけの量、よく入りましたね。そこに私は驚きました。

「ん？　なんだ、限界か？」

「いえ、まだいけますけど・・・。」

「そうこなくっちゃ！」

ハア、私、執事ですから嘘は苦手なんです。いえ、苦手と言いますか、こういうなんの邪念もなく純粋な気持ちで接してくる人に嘘を

つづのが苦手です。からかう事は出来ますよ？ 趣味ですから。因みに、全くの余談ですが、今の勇儀殿の服装は鮮やかな模様のついた明るい紫色の着物を着崩して着ています。肩とか鎖骨とかもろに言えていますが残念。私はそういった事を全く気にしません。ついでに私は普段の執事服に黒のマントをはおっています。何故マントか？ 気まぐれです。

「ンク、ンク、ンク、プハア〜！ うまいねえ。」

「プハ、まあ、確かにおいしいですね。これはぜひ買っていきたいです。」

「この酒は私も一押しだよ！ ……ところで、鏡夜は此处では見ない顔だけど、新入りかい？」

「なんの新入りかは理解しかねますが、私はお仕事で地霊殿にお住まいのさとり様の執事をしております。まあ、一週間程度ですけど。」

「地霊殿に？ またモノ好きなのが居たもんだねえ。あそこで働こうっていう奴も滅多にいないって言うのに。」

でしょうね。

「まあ、確かにあそこで働こうって人は少ないかもしれませんが。私は全く気にならないのですが。」

「そりやまた、変わりもんだねえ。その飲みっぷりと言い、気に入った！ ほら、飲みな！」

「頂きます。」

・・・プハツ、ふう、美味しいですね。

「美味しいのですが、そろそろ本気で帰らなくてはいけないので、今日の所はこれにて。あ、お代はこれで足りみますか？」

勇儀殿にお金（先ほど作った）を渡す。

「十分だ。奢ってくれるのかい？」

「はい、良いお酒を教えてくれた礼です。」

「そうかい。なら、ありがたく奢ってもらおうとするよ。」

では、と言って、瞬間移動・・・代償なしの方で地霊殿に移動します。砂糖はちゃんとかってありますよ？ ついでにお酒もですけど。

「ただいま戻りました。」

「あ、鏡夜さん？ ずいぶん遅かったですね？」

「申し訳ございません。色々ありまして。」

「ほかすなんてらしくありませんね？」

「・・・鬼と呑んでました。申し訳ありません。」

「鬼と？ ・・・もしかして、勇儀さんですか？」

おや？ あの方は有名人なのでしょうか？

「知っているのですか？」

「知っているも何も、此処でも地上でも知らない人・・・もとい、妖怪は居ないと思いますよ？ まあ、あの人に絡まれたのならしょうがないですね。大目に見ます」

「ありがたき幸せです。」

「それで、どのくらい呑んできたのですか？」

「そうですね・・・酒瓶で床が見えなくなるぐらいでしょうか？ あ、代金のほどはこちらになります。」

「ひやく・・・！？ ・・・そんなお金、何処から？」

「作りました。」

「・・・そうですね。そこはあえて無視しておきます。というより、

随分と酒豪なのですね？」

酒豪？ 私が？ 否否、酒豪ではありませんね。

「酒豪ではありません。それでも、生前はちょっと呑んだだけで顔が真っ赤になっていたのですよ？」

「？ おかしな話ですね。じゃあ、何で酔っていないんですか？」

「お酒はおいしいとは思いますが・・・、この体を作る際に有害物質は全て受け付けないようにしましたからね。アルコールなど、すぐに削除されます。」

「そうなんですか。」

さて、ちょっと長く話し過ぎちゃいましたね。・・・何故、さとり様との話は何時も長くなるのでしょうか？ あちらの知的好奇心の所為なのか、はたまた私が喋り過ぎなのか。まあ、どちらでも私のすることには変わりがあるので別に良いのですが。

「今はどういう状況ですか？」

「状況？・・・ああ、今は晩御飯を作ろうとしていたところです。」

「

「承知しました。では、お手伝いさせていただきます。」

「よろしく願います。」

料理ですか。何気にお嬢様たち以外の人に振舞うのは初めてですね。まあ、悪くないです。

「では、今日のメニューは？」

「今日は和食で行こうかと思っています。」

「把握。作るものは決めていたりしますか？」

「白米、味噌汁、焼き魚、お浸し、と言ったところでしょうか？」

「ふむ、ならそこにお漬物と冷奴を追加しましょう。それだけでは夜にお腹が空いてしまいます。そこからの間食と言ったコンボにつながるのですが、間食はあまりしない方がよろしいので、晩御飯で事足りるようにしないと。」

「フフツ、分かりました。では、早速作りましょうか。」

と言うわけで、料理開始です。まず、白米ですが、この土地には炊飯器なるものが無く、釜戸でフーフーしなければいけないようです。味噌汁もまた然り。・・・しかし、冷蔵庫はあるのですね。良く分かります。電子レンジは無いようですが・・・何故冷蔵庫だけあるのでしょうか？ 気になります、気になります、気になります、そうは思いませんか？

と、無駄なこと考えていないで早速行動・・・に・・・

「・・・フツ。」

な、何と言う事でしょう。ここは天国か何かでしょうか！？ 料理を作る所に入ったら何故かレンが先にいて、釜戸をフーフーしているではありませんか！！ 素晴らしい！！ エクセレント！！ おおっと、フラツとしてしまいました。

「・・・ふー。よし、私は冷静です。決して熱暴走など起こしていません。」

「どうしたのですか？」

「いえ、釜戸をフーフーしているレンがあまりにも可愛すぎてちょっとフラツとただけです。他意はありません。」

「邪な考えでいっぱいですね。」

「あんな可愛い生物を見て何も感じない方がおかしいですよ。」

全く、さとり様は分かっていますね。幼じょゲフンゲフン！ 子

供の素晴らしさを小一時間ほど御説明してあげたいぐらいです。

「あ・・・鏡夜。」

「レン、お疲れ様。なんでご飯を？」

「誰もやってなかったから・・・私がやろうと思った。」

おお！ まさかのボランティア！！！！ 出来の大変よろしい娘を
持つて私は幸せ者です。

「・・・えらい？」

首をコテンとさせて訪ねてくるレン。 よろしい、ナデナデしてあげ
ましょう！ 可愛いですから。

「うん、偉いよ。すごく偉い。」（ナデナデ）

「・・・フフ。」

撫でられて気持ちよさそうに目を細め、わずかに笑っているレン。
ああもう！ 可愛すぎますよこん畜生！！

「・・・残念なイケメンとはこの事でしょうか？」

「ん？ 何か言いましたか？」

「いえなにも。それより、早く準備しましょう。」

「そうですね。」

さとり様の命により、名残惜しいですがレンの頭から手を離します。
ああ、そんなに懇願するような目で見ないでください。

「ハア・・・じゃ、作りましょうか。」

「何故私が悪者みたいになっっているのですか？」

「そんなことはありません。あ、レンも手伝ってくれるかな？」
「うん・・・これやってる。」

と言ってまたフーフーし初めてレン。お持ち帰りしたいです。あ、お持ち帰り出来ますね。

「では、私は焼き魚とお浸しを作りますね。」

「じゃあ、私は味噌汁と豆腐とお漬物を。」

まず、焼き魚ですが、定番どころで鮭です。ああ、因みに私の調べたところによりますと、この幻想郷では魚はあまりとれないそうです。まあ、海が無いので当たり前なのでしょうけど、それを解消しているのが八雲紫と言う方らしいです。どうやら、能力で幻想郷に魚を提供しているようです。まあ、最近の様ですけど。それ以来、結構皆さんが魚を食べるようになったようです。地霊殿も然りと言ったところですね。

焼き魚、と言っても、ガスコンロみたいなのがある訳ではありません。七輪ならあるのでそれで焼くとしましょう。えーっと、人数は、私を除いてですから、5ですね。やりますか。

「・・・鏡夜。」

「うん？ どうしたの？」

「ご飯炊けた。」

「なら、お茶碗に盛りつけてくれるかな？」

「うん。」

本当に出来た娘です。

魚を焼いている間にお浸しを作りました。まあ、ものすごく簡単なのですけどね。水で洗って 何故、水道はあるのでしょうか

？ 水を切って、醤油を付けて、鰹節を適量乗せてハイ終わりです。・・・簡単過ぎますね。昔の方々は、質よりも唯食す事を優先したのでしょうか？・・・あり得そうですね。案外、お刺身の起源もそういう所かもしれないですね。『焼いて食べるのが面倒なら、そのまま食べれば良いじゃないか！』みたいな感じで。

「鏡夜さん、どうです？ 何か不具合はありますか？」

「いえ、大丈夫です。」

「・・・？ 魚の数が足りないようですが？」

「？ いえ、これで合ってますよ。」

さとり様、こいし様、お空殿、お隣殿、そしてレン。 1 2 3 4 5、合っていますよね？

「・・・鏡夜さんの分は？」

「私の分・・・ですか？ 私はそもそも食事を必要としませんので必要ありませんよ。」

「駄目です。食事は皆で一緒にがこの家のルールです。この家の執事である以上、この家のルールに従ってもらいますよ。」

「・・・承知いたしました。しかし、本当に私の食事に意味はありませんよ？」

「皆で食べる事に意味があるんですよ？」

魚の片面が良い感じに焼けたので、全で一瞬でひっくり返します。
無論、能力で。

「・・・そうですか。皆で食べる事に意味が・・・。」

「そうですよ。」

「了解しました。では、私の分も用意します。」

お浸し一つ追加です。魚？ 魚は後でレンに……フッフ。

「・・・ふむ、魚はこれぐらいで良いですね。さて、お皿に入れましょうか。」

お皿に入れ、醤油をちよつと加えるとおいしいです。あ、知ってますよね。

「レン？　ちよつと良いかな？」

「……何？」

「これ（魚）フーッしてくれないかな？」

「ん、分かった。」

そう言つと、息を吸い込み、そして

「フー……！！！」

炎を吹きました。そう！　これがレンの数ある能力の中で希少な『戦闘向け』の能力です。その名も『火を吹く程度の能力』。そこ！　地味とか言わない！！　レンが悲しんだらどうするのですか！！

この能力、唯火を吹くだけなのですが、その吹ける火の質や、タイプの数が膨大なんです。例えば、ガスバーナーのように火を吹く事も出来れば、熱線を吹いたりもできます。質で言うと、唯赤い火吹くだけではなく、青、白、本気になつたら黒と、まさに万能です。・・・黒炎だけは何か違う気もしますがそこは気にしてはいけません。前、気になつて聞いてみたところ、『気にしたら・・・メッ！』と言われて以来気にしないようにしています。・・・可愛すぎて父性が鼻と口から出てしまったのは仕方のない事です。

「よし、いいよ。」

「ん。」

ジューと音を立てている焼き魚。まあ、私のはこんな感じで良いでしょう。基本、私は何でも食べようと思えば食べれますし。・・・劇物だった場合、深刻なエラーが発生して、何が起るか分かりませんけど。

さて、運びますか。

「さとり様、お持ちしました。皆さんの席はどこですか？」

「ありがとうございます。私が一番右上でその前がこいし。私の隣がお燐で、こいしの隣がお空です。鏡夜さんたちは適当に。」

「はい。」

と言うわけで私はお燐殿の隣でレンは私の膝の上です。

「おかしい!!」

急にさとり様がシャウトしましたけど、なんなのでしょう？ 何かおかしい事でもあるのでしょうか？

「なんですかその『何が？』みたいな顔は!! 二人してそんな顔しないでください!!」

「え、おかしい事ありますか？ レン、どう思う？」

「・・・おかしいのは、貴女。」

「私ですか!? いや、私はおかしくない筈です!! 何故レンさんは鏡夜さんの膝の上に乗っているのですか!?!」

「・・・特等席。」

「私がアーンして楽しむ為ですけど？」

「何当たり前のように口走っているのですか!?!」

・・・もしかして。

「あれですか？ レンに嫉妬ですか？ 此処に座りたいのですか？」

「なっ」

「ダメ。此処はレンの席。」

レンは独占欲が強いらしいですよ。まあ、私はお嬢様の所有物なのでそこら辺はあれなのでけど。私の独占権は常にお嬢様にあり！
レンは二番目です。

「座りませんよ!?!」

「なら、何をそんなに興奮していらつしゃるのです？」

「興奮なんかしてませんよ!?! ただ、そういう事は道德的に問題があると思うんです!?!」

「大丈夫ですよ。私とレンは親子関係みたいなものです。言わばこれも親子のスキンシップです。ね？」

「うん。」

ほら、何も問題ありません。

「~~~~~っ、分かりました!?! 勝手してください!?!」

何をそんなに怒っているのでしょうか？ 別段、珍しい事をしてるわけでもありませんし、私のレンに対する溺愛っぷりは先ほど見せたはずなので既に周知の事実だと思うのですがはて？

その後、食事が冷めないうちに皆さんが集まり、お隣殿には焼き魚の件で『ベリーグッド』を頂きました。恐悦至極です。食後は普通に食器の片付けをし、さとり様はまた仕事に戻られたので、今度こそコーヒーを淹れてお持ちします。砂糖は好みです。

「熱いですのでお気を付け下さい。」

「ありがとうございます。」

ふう、それにしてもさとり様のお部屋は割と広いですね。お嬢様のお部屋よりも広いのではないのでしょうか？ まあ、この館には使用人がいませんからそういう事なのでしょう。

「熱っ。」

「大丈夫ですか!？」

だから気を付けて忠告したのですが！

「だ、大丈夫です。ちょっと驚いただけです。」

「いけません、失礼します。」

と言って、さとり様の顔を正面から覗きこみ……。

「舌、出して下さい。」

「……え？」

「火傷していないか調べますので出して下さい。」

「な、だ、大丈夫ですよ。このぐらい……。」

「駄目です。早く出して下さい。ほら、あー。」

「……あー。」

「……よし、火傷はしていなさそうですね。」

「はい、大丈夫です。失礼しました。」

「・・・いえ、ありがとうございました。」

その後、さとり様の仕事が終わるまで私はさとり様の後ろに控えていました。

～さとり～

彼は、変わっています。

それは既にあの騒動に関わった全ての人の周知の事実なのかもしれないませんが、それでも私は変わっていると云います。

私の能力を知って、気味悪がるどころか『便利』と言う所。主をからかったり、偶に暴言を吐く所。レンさんにたいしての過剰なスキンシップ。

私の能力は他人からしてみれば決して気持ちのいいものではないでしょう。当然です。心を読むのですから。ですが、彼はそれを便利と言う。恐らく、私が彼の心を読んでいても、それは変わらないでしょう。そんな気がします。

私をからかい、偶に従者にあるまじき暴言を吐きます。不真面目な従者・・・ではありませんね。むしろ、その逆。彼は完璧です。何でもそつなくこなします。しかし、それなのに私をからかいます。食事前もそうでした。からかうのが趣味だと言っていましたし、実際そうなのでしょう。ですが、そんな彼は私がコーヒーを飲んで火傷しかけた時、普段の冷静で悪戯心満載の顔を急に真面目な顔に変えて私の心配をしてきました。従者としては正しいのでしょうか、あまりの豹変っぷりに少し驚きました。・・・不覚にも少しドキッとしてしまいましたし。

レンさんに対しては・・・まあ、普通に愛情を注いでいるのでしよう。あの教育でよくあそこまで出来た子供が出来たかと思うと不思議でなりませんけど。

「ふう・・・。」

で、私は今お風呂にて入浴中です。今日一日、随分と濃い日になりました。これも彼・・・鏡夜さんのおかげでしょう。ペットと妹以外と話すのも久しぶりですし、良い一日でした。後、六日ですか・・・。短いですね。いつそのこと、紅魔館の主に言ってみましょうか？ 鏡夜さんをくださいと。あれほど出来た従者、そうは居ません。

「いえ、無理でしょうね。」

あの吸血鬼は鏡夜さんをかなりという言葉では言い表せないほど大切に思っているようです、何より、鏡夜さん本人が彼女以外に仕える気がなさそうですから。・・・残念ですね。

「さとり様、お湯加減はどうですか？」

！？ きよ、鏡夜さん！？ 何故、扉越しにいるのでしょうか！？

「何故そこにいるのですか！！？」

「何故ですか？ 入浴中に不備があつてはならないと思い、こうして待機しているのですが・・・。」

「いいです！！ 入浴大丈夫ですから、私の部屋で待機しててください！！」

「はあ・・・しかし、お着替えは？」

「それぐらい自分でやります！！」

「・・・分かりました。では。」

・・・色々と予想の斜め上を行き過ぎて大変ですね。彼がいるだけで日々の生活に飽きが無くなりそうです。・・・心労を溜まりそうですけど。

く鏡夜く

さとり様に自室にて待機と言われたので、今待機しています。

「「じゃんけんばい。」」

私、グー。レン、チヨキ。

「あっち向いてほい。」

「あ・・・。」

勝っちゃいましたよ。

「むう・・・。」

「止めますか？」

「・・・やる。」

と言うわけで、10戦中7勝3敗です。

「むうむうむう・・・。」

レンがむくれちゃいましたよ。可愛いですね。

「そんなにむくれないで。ほら、ココア飲む?」

「・・・飲む。」

「はい。」

両手でコップを持ち、フーフーしながらココアを飲むレン。・・・
いい!!

「何やってるんですか?」

「レン観賞ですけど?」

「もうツツコミませんよ。では、私はもう寝ます。明日もまたよろしく願いますね?」

「もちろんです。お任せ下さい。」

フツとろうそくの火を消します。

「お休みなさい。」

「お休みなさいませ。」

さて、見守りましょうか。さとり様が起きるまで。

「・・・レンはどうする?」

「・・・此处で寝る。」

と言って、体を横にして私にもたれかかってきました。いや、構いませんよ?

「お休み。」

「・・・う・・・ん。」

あと6日、滅私奉公、粉骨碎身、お仕えさせていただきますよ、さ

とり
様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8502w/>

東方従者録～すべては我が主の為に～

2011年11月17日19時57分発行